

ナイチンゲール方式による看護教育の特徴とその拡がり

— 教育の創造と伝承 —

広島文化学園大学看護学部・看護学研究科
佐々木 秀美

論文要約 「明確な目的は実現していかなければならないが、その目的を実現していくための道は、大いに発見していかななくてはならない」と述べたナイチンゲールの教育方法は“見習い制度”であり、その教育の特徴は①マトロン (Matron) と呼ばれる看護総監督の存在、②寄宿舎におけるホーム・シスターによる教育、③医師による基礎専門教育、④病棟シスターによる実践教育にある。

その教育はまず、自己訓練する精神修養の方式を、看護教育の中に導入し、マトロンと呼ばれる理想的な看護師像を組織の頂点に位置付け、一つの目標を示したことである。次に、規律のある道徳的な環境に寄宿舎をおき、優れた監督官によって秩序正しく管理され、看護師に必要な基礎知識を修得させたこと、臨床経験を大きな学習の機会とし、そこで観察した事や経験したことを記録させる事によって自己の看護を総括、評価させ、看護を科学的に展開させたこと、臨床経験の前に医学的知識を学ばせ、看護の対象である患者の支援法につなげたこと、そして何よりも看護総監督の位置づけや見習い生の受け入れから評価の方法まで規律ある訓練のための規則を体系的に作ったことである。そこには看護教育に向けた独自のアイデアとそのアイデアを実践する創造的な取り組みがある。それは他方においては、看護師たちが一つの組織の中で秩序ある行動ができるように徹底的に訓練する、つまり、“つくる教育”であったとも考えられる。ナイチンゲール方式を取り入れたアメリカでは看護教育を積極的に取り入れ、独自の創意を持ち、アメリカ方式に発展させた。ドイツは基本的なところで思想的に噛み合わずナイチンゲール方式は余り発展しなかった。インドはわが国同様、宗教的な問題があり、余り発展していない。そして我が国もナイチンゲール方式を採用したが、病院付属の徒弟制度的な方式が長い間、存続した。

キーワード: ナイチンゲール教育方式の特徴、教育の創造、ナイチンゲール看護師達の評価、看護教育の普及

■ 序 言

「明確な目的は実現していかなければならないが、その目的を実現していくための道は、大いに発見していかななくてはならない」¹⁾と述べたナイチンゲールの教育方法は“見習い制度”であった。

既に筆者が『ナイチンゲールの看護観—その目的実現のための教育方法— Nursing is not an Art but a Character —』²⁾で報告したように、今日、“見習い制度”は徒弟制度をイメージさせる旧式な教育方法である。しかし、それは、経験・

感化・訓練の効用を期待し、その職業に必要な技能の獲得と人間的な成長を目指すものであった。その技能が患者全体を包括した技 (art) としてあるいは科学 (science) であるとしたら、人の健康に関して科学的にその技術を提供する行為でなければならない。更に、看護が医療の分野でその独自性を主張するためには、医学とは違う分野を新たに開拓しなければならない。そこに看護教育に向けた独自のアイデアとそのアイデアを実践する創造的な取り組みが必要となる。

人の健康に関して、ナイチンゲールは『看護覚

ささき ひでみ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学看護学部

え書』³⁾で病気の定義をする一方、人の健康に不可欠な要素を身体的・精神的・社会的側面から述べている。特に、作業所での無理な姿勢、運動不足、短い食事時間と栄養不足、長時間にわたる過酷な労働、不潔な空気の中で引き起こされる病気は決して環境と関係がないとは言い切れず、「そうした日常が人々の健康レベルを下げ、身持ちを悪くさせ、早すぎる墓場行きへと駆り立てている。」⁴⁾と述べ、雇用者が支払う賃金と引き換えに、労働者たちは労働と健康とそして生命とを提供しなければならないのであるとも述べている。かつて、ジャン・ジャック・ルソー⁵⁾が、「人間の知識の中で最も進んでいないものは人間に関する知識である」⁶⁾と述べ、病気の発生に関して社会的な側面から言及し、更に「人類の不平等の中には自然的不平等と社会的不平等がある」⁷⁾とも述べ、それらが人の健康を阻害する因子になり得ると言及した。フリードリッヒ・エンゲルス⁸⁾やカール・マルクス⁹⁾も同様に、社会的不平等の中で多くの労働者が最悪の生活環境の中に住まい、長時間に及ぶ労働を強いられ、貧困による生活苦は彼等を栄養失調に陥れ、子供達は饑餓状態で放置され、その生命は蝕まれていると主張していた。

人々の健康問題は生存権の問題でもあり、それは、一つの地域・あるいは国家の水準を示すものである。彼らが述べたように、人々の健康は身体的・精神的・社会的因子で害される。しかしながら、人間の健康に関する限り、それら相互の因果関係についての研究は不足していた。無知が病気に、病気は貧困を、そして貧困が無知にという社会的要因と健康との因果関係についても社会学的研究で問われた問題である。生を受ける前の、つまり先天的に何等かの障害を受け、形態的・機能的に影響を受ける場合の自然的不平等は、社会的諸状況が直接・間接的に個人の健康に影響を与える社会的不平等にもつながる。ゆえに、人々の健康問題は、何年も前から気づかれずに人の身体や・精神に影響を与えつつそこに存在する社会的問題でもあった。

既に筆者が『ナイチンゲールの教育思想の源流 日常生活は心に問いを抱かせ、知性はその問いに答えを要求する』¹⁰⁾、『ナイチンゲール精神的危機から自立へのプロセス』¹¹⁾、『ナイチンゲールイギリス陸軍を改革する一学習(経験)したことから学習せよ』¹²⁾、『ナイチンゲール女性の専門職を創設する一19世紀は女性の世紀』¹³⁾、などで報告し

たように、女性の専門職を創設すること、それは、ナイチンゲール自身が経験し、認識した社会問題とその解決・改善のための取り組みであった。そして医療の中で新しい女性の為の専門職を創始するという未踏の創造的な取り組みである。彼女が実施した教育は一般にナイチンゲール方式と呼ばれている。それは①マトロン(Matron)と呼ばれる看護総監督の存在、②寄宿舎におけるホーム・シスターによる教育、③医師による基礎専門教育、④病棟シスターによる実践教育¹⁴⁾である。

さて、わが国のあらゆる分野に必要な人材養成を期する学校教育制度が整備されつつあった明治初期、ナイチンゲール方式による看護教育も導入された。大正・昭和の時代から平成の時代まで紆余曲折しながら、時代の文化・経済を反映させつつ伝承されてきた看護教育も、高等教育として発展しつつあるが、大学教育のマス化に伴う現象の中で、その教育機関の特徴や教育内容や教員の質的向上の必要性も問われている。看護教育の質的向上を考えると、あるいは現在の看護教育の問題を考えようとしたとき、看護教育草創期のナイチンゲール方式と呼ばれたその教育の特徴を伝承しつつ、新たな教育の方法を模索し、新しい展開へと進むことが次代を受け継ぐ今日の看護教育機関における責務であろう。そこで、本論では、教育効果が高いとして評価され、世界的に広がったとされるナイチンゲールの教育草創期の教育の取り組みについて検証し、その教育の特徴について若干の考察を加え、いかに伝承し、創造していくかについての示唆を得る。

■ ナイチンゲール方式の特徴

1. マトロン(Matron)と呼ばれる看護総監督

マトロン(以降、看護総監督とする)というのはイギリス独特の使い方であり、上流階級の一家の主婦の尊称である。これが病院においては公的な組織の女性の長に対して使われるようになったとされる。看護総監督は現在の看護部長及び総婦長の地位に該当する。ナイチンゲールの教育方法は先述したように、看護師学校を病院付属にし、女性達を見習い看護師として採用、現場で実際、患者に接しながら模倣するという形で一般看護業務を学ぶ事であった。その為、必然的にその教育の最高責任者は病院の看護総監督が担う事となり、見習い生達はその支配下に置かれた。

クリミア戦争従軍中、ナイチンゲールは、看護の組織的な権限と責任が明確でなかった為に多くの困難を経験した。彼女は、看護総監督の権限と責任については、すべてが余すところなく規定されていなければならない¹⁵⁾と述べ、全文52項からなる看護婦規則を規定している。ナイチンゲールは看護部門における権限と責任を、規則として明文化することによって、他部門との衝突を避けることができると考えたのであろう。医療機関では、その規模が大きければ大きいほど、様々な職種が協働する。よって、その組織における指示・命令系統がしっかりしていなければ、秩序は保たれない。『ナイチンゲール著作集第三巻』¹⁶⁾の巻末には、ナイチンゲールが規定した看護婦規則が添付されている。その規則第1条に“各病院に看護総監督を置くこと”と規定され、第13条迄が看護総監督に関する規定である。その内、1～13までは、看護総監督の権限と責務に関してであり、全ての看護師は看護総監督に絶対服従するよう求められた。また、総監督は教育における最高責任者であり、看護の教育を受ける見習い生達の選抜や退学に責任を持つと同時に、その教育にあたるホーム・シスターや病棟シスター達の最高責任者でもあった。そして、教育に従事するこれらの者たちには、教育に関する会議の開催が義務付けられた。

看護の訓練を受けようとするものは、看護総監督に氏名、年齢、出生地、教育背景、前職歴、婚姻の状況等を記入した入学願書と性格証明書の書類を提出する。書類審査のうえで入学が認められると“ナイチンゲール基金による見習い看護師の訓練に関する規則”に基づいて訓練の許可が与えられた。その後、1か月間の試用期間中の訓練で適性、人格のチェックがなされた。次に、本人の意志確認がなされ契約が取り交わされると“ナイチンゲール基金による見習い生の職務”に関するガイダンスが渡された。このガイダンスには“あなたに要求される事”として、真面目・正直・誠実・信頼性・時間厳守・平静さと従順さ・清潔と端正¹⁷⁾が示された。“熟練すべきこと”として浣腸他13項目(3. 病棟シスターによる実践教育の項参照)が記述されている。

看護総監督は入学者の申請受付から、その適正について慎重に検討する責務の他に、講義やデモンストレーションを行うよう指針が示された。他、医学教師から行われる口頭試問に立ち会い、病棟

シスターと一致する綴り込み帳¹⁸⁾を持ち、病棟シスターの報告とホーム・シスターの報告によって月一回、学生たちの進歩の度合いを評価した。この評価は一年間の教育課程が終了するまで継続してなされ、ナイチンゲール基金委員会の年度末評価の資料になった。

病院で働く全ての女性に対して権威と規律とを持っている人が看護総監督であると同時に、自分の病院の看護師達に対して、こうなってほしい、訓練によってこの様になって欲しいという、まさにその模範であり、指導者でもある¹⁹⁾。看護総監督は看護師として最も権威のある存在であると同時に、病院中で最も優れた看護師でなければならなかった。

ナイチンゲールは優れた看護師とは優れた女性であり、優れた女性とは「より良く、より高く、より清らかな資質を備えた女性」²⁰⁾であると述べた。看護総監督は全ての看護師の目標であり、看護師達の理想的人物としての象徴であったろう。キリスト教における神とは律法であり、神とは絶対的な存在である。ゼーレン・キルケゴール²¹⁾の解釈に従えば、神に対する愛こそ、真の利己愛であり²²⁾、神の立場からすれば自己愛とは神に対する愛に他ならない²³⁾。つまり、あらゆる行動を決定するのは神の意志であるとともに自分自身の意志でもある。人が行動する時、自己の行動を決定付ける要因が規律である。規律の精神が十分でない時、絶対の権威者としての存在が有効となる。つまり、ナイチンゲールはキリスト教における“神”を絶対視し、神を人間の理想像として位置づけ、その神に近づけるように自己訓練する精神修養の方式を、看護教育の中に導入し、組織の頂点に位置付けたと考えられる。

2. ホーム・シスターと寄宿舎制度

寄宿舎(Collegium)は単に厚生施設としてのみ存在したのではない。看護師規則40項には、看護師の宿舎は病棟勤務に便利な位置にしなければならないと規定され、見習い生達にも独立した寄宿舎が与えられた。先述したようにナイチンゲールが実施した寄宿舎制度はケイ・シャトルワース²⁴⁾が教員養成に採用した“見習い制度”にも採用されていた。見習い生達の寄宿舎には常にホーム・シスターが寝起きを共にした。ホーム・シスターは学級の教師であり、見習い生達の女教師である。彼女は見習い生達に授業を行ったり、

技術・演習を行ったり、臨床現場での講義やデモンストレーションを行ったり、試験の監督を行ったりした。彼女は寄宿舎での見習い生達の状況を月1回、看護総監督に報告をする義務を負い、看護総監督はその報告を通じて見習い生達の病棟での学習状況を知り、指導方針を立てるのである。また、医師による基礎教育で見習い生達が不足していると考えられた医学の補足授業も行った。この補足教育には恐らく、初等教育的な“読・書・算”なども含まれていたであろう。というのは、イギリスにおける女子教育は1860年代には十分ではなかったからである。

ホーム・シスターは、見習い生達一人一人について日常的に気を配り、心を尽くしてその人を神の教えに導くなど、見習い生達の日常生活が道徳的に感化されることであった。その為、女性達を宗教的に教化すべき賛美歌や聖書の教育を行った。ナイチンゲールは「環境は道徳的で宗教的かつ勤勉で節度ある上に朗らかな調子や雰囲気満ちている。だから、どの階級の若い善良な女性が入ってきても、心身の健康を損なう心配のない一つの“ホーム”として訓練学校と病院とが運営されている。道徳的で精神的に高める援助があり、慈しみに満ちた母親の様な気遣いが全てに及んでいるので、全体が優れた女性達を訓練し、誘惑を退けさせ、現実と与えられた仕事に取り組む事ができる状態になっている。」²⁵⁾と述べている。この記述からも理解できるように、寄宿舎は道徳的であるように、しかも精神的に感化されるようにするためであった。そして、見習い生たちを外部からの誘惑から遮断させ、現実と与えられた仕事に取り組む事ができるようにした。そして、見習い生達は寄宿舎で、『聖書』を中心とした道徳的教育を行った。“ナイチンゲール基金による見習い生の時間表”に見る見習い生たちの日課には、この教育に与えられた時間は、1時間と30分である。

そして、ホーム・シスターによって寄宿舎内の日常生活が管理・監督されたとなれば、それは当然、修道院や軍隊同様の規則正しい生活が導入されたことであろう。実際、寄宿舎では20時30分に帰寮、22時に就床、翌朝6時に起床、朝食を済ませて7時に病棟にでかける。綿密に計画されたこの時間表からは、それ以外に目を向ける時間的余裕は無い。見習い生達の就業時間は日勤が午前7時から帰寮が午後8時30分であり、昼食時間の1

時間を差し引いても12時間と異常に長い。産業革命が成功し、工場法が成立した頃のイギリスでは、工場労働者のほとんどが16～18時間労働を余儀なくされていた。1847年に“10時間法案”が婦人と子供の時間を制限している。それから十数年は経過しているのであるから、一般労働者と比較しても長い労働時間といわねばなるまい。こうした時間に病棟での就業時間の12時間を合わせると残る時間は僅かである。12時間の就業時間のうち課業に費やされる時間は僅かに1時間30分であるから、その大半は看護法の習得に充てられた。他に8時間の睡眠、毎日2時間の運動とレクリエーションが設けられた。この僅かな時間で洗面や自然の要求を考慮すると個人に残される時間はない。即ち、考えるゆとりもなくなるのだ。彼女達は細かな時間表で管理され、病棟師長の許可なく病院外にでる事は許されていない。ナイチンゲールが見習い生に与えたこの労働時間、それは基本的には労働者には勤勉性をという考えが反映されたのであろう。

ミッシェル・フーコー²⁶⁾は、教育機関や救済援護施設が修道院の生活態度と規則正しさを受け継いでいたと述べ、時間・分・秒レベルでのその活動の取り締まりは、一種の技術的要素を持つ。そうした時間割は古くからの遺産であり、その最初のモデルは修道院であった²⁷⁾と述べた。修道院のような日常生活における実践の中で、日々自己反省する人はその後の意志決定に影響を与え、次の場面では必要があれば行動変容につながるであろう。そうでない人はいつまでもそこにとどまるか同じ過ちを繰り返す。それは突発的に何かをするからであり、そこには熟慮がない。これも一つの訓練によって高まっていくことであろう。我々は常に経験から学び、それに新たな考えを加えて何かをなす。ここにナイチンゲールの述べる理想的看護師の育成が可能となった要素がある。

女性を訓練する事、これは一大社会改革であった。品性の悪い不道徳な女性達を道徳にする事、即ち、それは社会で有用な存在にする事であった。寄宿舎における神的な雰囲気、道徳的な雰囲気における教育は見習い生達の心が教化されるように配置されたものである。彼女は、「知性、情熱、倫理的行動」²⁸⁾をもった女性がなぜ、働く場所がないのかと主張していた。ナイチンゲールは優れた看護師は優れた女性であると述べ、その知性、倫理、実践の全てにおける最上のものを患者に惜

しみなく分け与えることができる看護師が優れた看護師であると述べている。どう行動するべきかを考えることのできる能力が知性であり、その知性に従って有徳な行動をすることが道徳的なのである。

エミール・デュルケイム²⁹⁾は『道徳教育論』³⁰⁾の中で道徳性の3つの要素として、規律の精神、犠牲的精神、自律の精神を掲げている。彼によれば、規律の精神は個人の衝動を抑制する努力を課するものであり、規則への尊敬である。これを実践する為には自己を犠牲にする精神がなければなり立たない。ジョン・デューイ³¹⁾は『民主主義と教育』で“徳”に対する考え方を示した。彼によれば社会的に有効に参加させる能力を発達させる教育は道徳的である。オットー・フリードリッヒ・ボルノー³²⁾は、教育の作用には“作る教育”と“待つ教育”があると述べたが、その意味でナイチンゲールは自己の価値規範に従って、徹底的に“作る教育”に専心し、目的を実現したのである。

ナイチンゲールは、看護を professional な職業であると述べつつ、ある時には専門職ではなく“看護は神の僕としての仕事”つまり calling”であると述べている。Calling”とは通常天職と訳されるが一つの職業に対し、強い衝動や行動を意味し、“神のお召し”といった意味合いもある。ナイチンゲールは自分の望んだ価値規範まで女性達が高まるよう教育する為に、修道院のような寄宿舎を提供したのである。

マックス・ヴェーヴァー³³⁾は『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で天職について論じている。彼の言葉を借りれば、神の国を求めるひたむきな努力と、ほかならぬ無産階級に対して教会の規律がおのずから強要する厳格な禁欲とが、労働者の勤勉性に影響を与えれば、資本主義的な意味における生産性を促進するということである。ヴェーヴァーは営利を天職と見なすことが近代の企業家の特徴となったのと同様に、労働を天職と見なすことが労働者の特徴となった³⁴⁾と述べた。彼が述べたようなことが天職であるとしたら、看護師の労働そのものが天職であるということになる。ナイチンゲールが看護専門職に求めた天職という概念は、さすれば生産性は低いがしかし、報酬も少ないという状況に対して看護師たちが無欲のシステムという天職概念にはまり込む危険性もあったろう。

3. 病棟シスターによる実践教育

病棟シスターは看護総監督同様、見習い生達のあらゆる職務について教育、訓練を行うのが役割であった³⁵⁾。病棟シスターの任務に関しては看護師規則に規定されている³⁶⁾。その職務は主に病棟の業務の効率的な遂行に関するものであり、その責任と権限を明確にしたものである。見習い生達は各病棟の実習に関しては病棟シスターと呼ばれる看護監督（現在の師長の職）達が教育指導に当たった。ナイチンゲールは、看護とは「患者の生命力の消耗を最小にするように整える事を意味すべきである。」³⁷⁾と述べ、病気状態にある患者の体力の消耗が最小限になるよう食事や水、空気や陽光、清潔や排泄といった基本的なニードに関して充足できるよう整えることであると述べている。それは看護法の修得にあり、人の健康回復に支援する事である。つまり、ナイチンゲールが提唱した教育のBは、病気を有した人にかに支援するかを学ぶ事である。

彼女たちは、ナイチンゲール基金との仮契約が済むと外科や内科の病棟に配属され、病棟シスター（今日の病棟婦長と同じ役職）によって実践指導が開始された。そして、実践指導はある特定の病棟、例えば男子外科病棟で1～2か月、あるいは3か月間、継続して為された。最初の1か月間は試用期間であり、彼女達の適性チェックの期間である。

『ナイチンゲール著作集第一巻』³⁸⁾、『聖トマス看護師学校100年の歩み』³⁹⁾によれば見習い生達の学ぶべき技術的な項目は以下の13項目である。

1. 水泡、火傷、はれもの、創傷の手当て、罨法、パップ罨法、小包帯を用いる
2. 蛭の内的外的用法
3. 男性、女性に浣腸をする
4. 脱腸帯と子宮疾患に使用する器具の取り扱い
5. 軀幹と四肢の最も効果的な摩擦法
6. 動けない患者の取り扱い、即ち、移動、衣の交換、身体の清潔、食事、保温（または冷やす）、褥層の予防と手当て、体位交換
7. 包帯法、包帯づくり、巻軸帯づくり、副子包帯のあてものをするなど
8. 患者のベッドづくり、患者が寝たまゝの状態でのシーツ交換
9. 手術に付く事が望まれる
10. 病人用全かゆ、くず湯、卵酒、プディング、

飲み物の調理が良くできる事

11. 換気への配慮, 昼夜共に病棟内に新鮮な空気を保つ事, あらゆる器具類が最高に清潔であるようこころしておくこと, 調理器具と同様に排泄に使用した器具についてでもある
12. 次の点に付いて病人を厳密に観察する事
排泄物, 咯痰, 脈搏, 皮膚, 食欲の状態, 精神錯乱や昏睡などの意識状態, 呼吸, 睡眠, 傷や発疹, 化膿の状態, 食事の影響, 刺激物および薬剤の影響
13. 快復期患者の扱いに付いて学ぶ事

以上に加え, 内科, 外科の看護法を学ぶ事になっている。蛭の内的外的用法や軀幹と四肢の最も効果的な摩擦法等は現在採用されていない技術であり, 当時の独特な治療法に由来するものである。その治療法は, 悪い血を取り除くための治療法であり, 一種の瀉血である。摩擦法は循環を促進する意味で身体への働きかけとしてよく使われるが, それは単に身体的働きかけというより, リラックスなど精神的療法としての効用が期待されている。そして今日, タッチング (touching) やヒーリング (healing) という新形式の技術などが紹介されているが, これらと類似の目的を持ち, 古くて新しい技術が摩擦法である。

また, 脱腸帯は近年まで実施されており, 筆者も患者に使用法を指導した経験を持つ。長期にわたる患部の圧迫は周辺組織の変性をもたらす問題があった。子宮疾患に使用する器具の取り扱いや手術介助などは外科に属する項目であるが, その他はおおよそ, 現在の基礎看護技術に属する。この様な医療行為に伴う技術および直接的な看護技術の実践の他に病棟の業務日誌の記録が義務付けられた。これらの記録は患者管理上の記録として, あるいは看護法の法則性を追及するための資料として, あるいは見習い生達の学業の評価の資料にもなった。

彼女達は“就業期間中の看護師の個人特性及び習得技能に付いての月ごとの記述”という評価表及び総評という記録簿によって病棟シスターによって評価された。病棟シスターは見習い生と同じ職務に関するガイダンスと一致する綴り込み帳を持ち, 週一回評価を行い, 看護総監督に報告する義務を負った。その評価は入学時に示された“あなたに要求されること”に該当する行動や態度の評価, 先述した“熟練すべきこと”に掲げられて

いる看護技術の到達度評価を行った。

特に, ナイチンゲールは見習い生達に医師達が行う臨床講義の“講義ノート”を作らせ, 病棟での実際の看護を通して症例を記録させ, これらと理論的に学んだものと突き合わせて分析する事を義務付けた。又, 日々の症例報告には“体温”や“脈搏”等のような項目をつけさせ, これらの観察と経時記録, 病気の始まり, 経過の観察とを記録させ, 分析するよう義務づけた。ナイチンゲールは「看護師は脈搏のいろいろな変化の意味と, 脈の性質が意味している事を理解しなければならない。」⁴⁰⁾と述べ, 疾患との関連性について言及している。患者の変化の一つ一つを見逃さない為にも, 先に述べた専門基礎知識と実践における観察との突き合わせが必要である。こうした経験の連続が知識となって, 次に起こり得る事が予測できるようになると, 他のケースにも適用できる。同校の卒業生であるレベッカ・ストロング⁴¹⁾は, 臨床で患者の症例から学ばせる方法は優れていたと述べている。ナイチンゲールは, 臨床経験を大きな学習の機会とした。そこで観察した事や経験したことを記録させる事によって自己の看護を総括, 評価させ, また, 新たなステップにさせようとしたものと思われる。経験学習とは観察によってえられた一定の性質であり, この連続が一つの学習を成立させる。ナイチンゲールは経験の概念を一つの法則として十分に説明付けることはできないと述べながらも, この経験の概念を学習のステップ・アップに使った。

デュルケイムは, 科学的たりえたる3要素として, ①観察によって獲得され, 理解され, 観察に与えられた事実の上に支えられる。②かかる事実は同一カテゴリーに分類されるほど同質性を示す。③科学は公正無私に只, 知る為に事実を研究する⁴²⁾と述べ, 科学はいかなる知識であろうと, 知識そのものの為に探求されるとき初めて始まると述べている。これらはナイチンゲールの観察に始まる看護の在り方の, より科学性を証明するものである。一人の患者の看護を通して学んだ事と理論で学んだ事を比較し, 自己の看護を振り返らせる手法は今日でも有効な教育法であり, より科学的なものである。

ナイチンゲールは見習い生を教導する病棟シスターの資質に関して厳しい見解を示しており, 「自分自身の主になれないものが, 他人の主になると, なまじ支配権を持ったがゆえに, ねた

みぶかくて不誠実な性質が頭をもたげてきて、皆のすべてをわが物にしたいくなり、しかし誰からも何もえられないと言うことになるのです。いつも恐れと混乱と当惑と疑念と錯乱の中であって、益々不誠実で妬み強くてじゃ悪となり、自分にも他人にも悲惨を招く原因となるのです。己を抑制する事もできず、己を良くのみ込むことのできないような人が、どうして他の人々の頭に立って、より高い見地から良く他者を制することができるのでしょうか。己に対して最も優れた主となり得る者のみが、良く他者の上に立つことができるのです。』⁴³⁾と述べている。自分自身の主とは自分を律する事のできる主体的自己の事であり、自己コントロールのできる人である。人を教育、指導する立場の者は自己の感情を抑え、理性的である必要がある。その為には自分自身を良く知っている事が大事である。病棟シスターは看護総監督やホーム・シスター同様、道徳的に優れた人物が任命され、この個人の優れた特性が見習い生達に感化されるように期待された。

4. 医師と基礎教育

ナイチンゲール方式による教育では、学生には基礎教育を行うとなっている。が、ここでいう基礎教育とは、看護専門者育成のための教育の、それも臨床実習をする前の理論的な教育のことである。その教育内容の看護法については先述したので、ここでは主として医師によって実施された医学的な基礎知識を得るための教育について述べる。

ナイチンゲールは、看護師の学ぶべきAは病気に対する理解であると述べている。彼女によれば病気とは「程度の差こそあれその性質は回復過程」⁴⁴⁾であり、外因によって侵されたり、内因によって衰えたりする過程を癒そうとする自然の働きである。病気の原因を環境との関連において考えようとしたナイチンゲールは、当時主流であった“自然の法則”の中でそれらを発見しようとした。つまり、ナイチンゲールによれば、周囲の環境を十分観察すれば、病気の原因を見いだすことができ、その環境を整えれば病気は自然に回復するというものである。ナイチンゲールが述べているように人には自然の回復力がある。しかし、医師や看護師がその専門的な知識で介入すれば、更にその回復が促進されることは間違いない。母親の体内を含む、人の成長・発達の過程で様々な因

子が働いてその人の健康が障害されるが、その何時の時期であっても社会に適応できる、つまり“生きていける”という事が基本的な課題であろう。彼女が述べたように、病気とは発病と同時に回復過程であり、何週間も何か月も、時には何年も前からきづかれずに始まっていて、このように進んできた以前からの過程の、その時々の結果として現れたのが病気という現象である。つまり、病気は日常生活の中で人と環境の相互作用によってつくられる。

原因と結果の関係において病気を説明したプラトン⁴⁵⁾の説明によれば、病気の原因は体を組み立てている土・火・水・空気の不均衡である⁴⁶⁾。土は肉であり、火は燃焼、水は体液、空気はもちろん身体内外の酸素のことであろう。これら乾と湿のバランスが健康の基であり、生命に不可欠な原則であると考えられた。プラトンの病気の原因説も、身体内のホメオスタジスの崩れであるとの説は、現在のホメオスタジス説の原点とも言え、今日的に考えても多少の根拠はある。

ヴィクトリア朝中期、ダーウィン等と共に代表的な科学者であるハーバート・スペンサー⁴⁷⁾は、『科学の起源』⁴⁸⁾、『進歩について—その法則と原因』⁴⁹⁾、『知識の価値—教育論第一部』⁵⁰⁾などの著作に、目的論的に言えば自然が健康のために有効な安全装置を与えてくれたのに、知識不足がこの安全装置の大半を無駄にしていると述べ、たくましい体力とそれに伴う元気とは、幸福の最大の要素であるから、その保ち方の教育こそ他の一切に勝る重要な教育となろう⁵¹⁾と述べている。その上で、スペンサーは生理学の一般真理と、日常行為との関係を理解するに必要な生理学のコースこそ、合理的教育の最も基礎的な部分であると述べた。

看護の対象である人間理解のための知識として、身体内部のメカニズムがどの様になっているのか、その機能がどの様になっているのかを知ることが、看護の中で実に重要な部分である。健全な人の身体を骨格や神経・筋肉といった生物学的側面から知り、更に血液やホルモン・水や電解質等の生理学的側面の理解、更に食物が摂取された後、身体内部でどの様に消化・吸収・排泄がなされるのか、取り込まれた食物が身体内部でどのように化学反応を起こして処理されていくのか。つまり、身体内部の生化学的側面の理解は人間のからだだが正常に機能するための必須の要件である。

この機能が病気によって障害されたとき生理学的にどの様に変化し、その変化がどのような現象として現れ、その現象を個人がどのように知覚し、そうした身体機能の変化が、私たちの日々の生活にどのように影響を与えるのかを知らなければ回復に向けての援助はできない。

ルネ・デュポス⁵²⁾は著作『人間と適応』で「健康な状態とか、病気の状態というものは、環境からの挑戦に適応しようと対処する努力に、生物が成功したか失敗したかの表現である。」⁵³⁾と述べている。人の日常生活の病因があり、日常生活と適応 (adaptation) という観点から人間の病気を見いだそうと考えたとき、それは人の身体、あるいは精神が何らかの刺激に対して対処する能力が不足したときに発症するのが病気であるとも言える。つまり、病気とは人の心身の一部に異常を来し、正常の機能が営めず、また、諸種の苦痛を訴える現象である。

そうした病気の進行中、その患者の体力の消耗を最小限にし、回復過程を促進させ、病気の再発予防の為に健康教育を行うのが看護師の仕事である。よって、ナイチンゲール方式による基礎教育では、健康な人間の生物学的理解、これは人間の解剖学的知識と生理学的な知識が必要であり、これらを理解した上で各種疾患に関して病態・生理学的知識と疾患の原因等を理解する必要がある。この基礎知識が医師から行われた医学の専門教育である。彼女の著作を総括すると教育の内容は以下のとおりである。

- ①解剖学、空気、水、食物などに関する化学、身体
の主な機能の生理学
- ②内科学、外科学
- ③包帯法、衛生教育、食事に関する授業、疾病の
原因、救急時の対応
- ④系統的な読書計画、小論文

この教育に協力してくれたのが、聖トマス医学校のホイットフィールド博士⁵⁴⁾とジョン・クロフト医師⁵⁵⁾である。ナイチンゲールは病院の教授達による臨床講義の内容に関しては「例えば、空気、水、食物などに関係して化学の講義、生体の主なる機能の知識に関して生理学の講義、内科や外科での種々の問題について総括的な講義⁵⁶⁾などを要求した。先述したようにナイチンゲールは、特に理論的に学んだ“講義ノート”と、臨床での症例記録を注意深く取することを義務付け、病気の因果関係に関して学習するようにした。更に、

「学習の時間には学ぶことに没頭し、注意深く記録を取り、更に例外的な症例でも関心を引くものについては記録をとる」⁵⁷⁾ことによって自分の観察力を高めていくようにしようと述べ、疾病の原因に関しては、原因は何かを考え、それに対し、何を成すべきかを考えようと述べている。

ナイチンゲールはクロフト先生の試験に関しても適切な表現力を養っているのかといった注意も怠っていない。学科の試験は「一年に少なくとも4回の筆記または定期的な口頭諮問による試験が全て看護師に即した形」⁵⁸⁾で行われる事を要求した。そのほか、定期試験の方法についてはそのルールについて述べ、このような系統的な方法でないと訓練学校を組織していくことはできない⁵⁹⁾と述べている。毎回実施される小試験で見習い生達の知識度を形成的に評価した。

当時の聖トマス医学校における教育は内科学、一般病理学、外科学、外科手術、解剖学、産科学、眼科学、生理学、医化学、薬物学、法医学、衛生学、科学、哲学、死体解剖、植物学、比較解剖学、精神病学等であった⁶⁰⁾。医師たちはこれらの教育の中で、診断・治療を導き出していた。看護教育では医学知識を有した上で、その病気からの回復過程において、看護師が病気を有した人の身体的環境の変化が精神的・社会的影響について理解し、そうした人の看護をいかに実践するかということに重点が置かれる。しかしながら、ナイチンゲールの看護法にも“蛭の吸血法”等という言葉が存在する様に、病気の原因の追及や治療法などはさほど進歩していなかったと思われる。少なくとも、当時の医療水準の中で、病気の原因を環境との関連において考えようとしたナイチンゲールは、当時主流であった“自然の法則”の中でそれらを見ようとした。つまり、ナイチンゲールによれば、周囲の環境を十分観察すれば、病気の原因を見いだすことができ、その環境を整えれば病気は自然に回復するというものである。それは、観察に始まる科学的な手法を用いたものであり、看護を受ける対象がいかなる健康問題を有しているのかにも繋がる探究でもあったと考える。イギリスにおける病原微生物の発見や外科学の発達等、医学も発展途上ではあったが、少なくとも、ヒポクラテス⁶¹⁾に始まる医学は、生まれたばかりの看護学とは理論的には雲泥の差がある。

■ ナイチンゲール看護師達の評価及び世界的普及

1. ナイチンゲール看護師たちの評価

ナイチンゲール方式による厳しい訓練に耐え、卒業をした看護師達はナイチンゲール基金委員会に登録され、看護師として各地に散り、その教育法を実施、伝授する役目を担った。ナイチンゲール看護師たちは、そのパイオニアとしての役割を果たす必要があったから、ナイチンゲールは要請があると惜しみなくその卒業生を送り出したのである。卒業生たちの活動は、陸軍の病院、王立病院、地域病院から貧しい人達の病院を経て、地域看護、そして農村へと国家単位で普及した。『ナイチンゲールと6人の弟子たち』⁶²⁾には、聖トマス病院ナイチンゲール看護師養成学校の卒業生たちのその後が書かれている。

中でも特筆すべき卒業生はアグネス・ジョーンズ⁶³⁾である。彼女は、聖トマス病院ナイチンゲール看護師養成学校で一番優秀な卒業生であったとされる。最初、彼女は女教師としての教育を受けた。その後の1860年、カイゼルスウェルト学園で半年間学んだ。この後、ロンドンに戻り、貧民街の救護作業に従事している。1862年に同養成学校に入学した。彼女の総括的な評価は「信頼がおける。仕事がきちょうめんで、知力・精力の要求される地位に高度の適性がある。看護師の指導上、彼女の宗教的ないし徳性の影響力は貴重であろう」⁶⁴⁾と評価された。アグネスはその後、ウィリアム・ラズボーン⁶⁵⁾の要請によって12名の看護師を引き連れ、リヴァプールの救貧院病院に赴任した。彼女は救貧院院長の嘲笑と軽視、看護者たちの貪欲さや飲酒癖、といったものと戦いながら、困難な仕事に取り組んだが、発疹チフスに感染して死亡した⁶⁶⁾。このアグネスの死を悲しんだナイチンゲールは『アグネス・ジョーンズをしのんで』⁶⁷⁾という論文を発表し、その中でアグネスをユーナ⁶⁸⁾と呼び、彼女の気高さを褒め称えた。

ルーシー・オズバーン⁶⁹⁾は1866年に聖トマス病院ナイチンゲール看護師養成学校に入学した。入学時の評価は「優れた感覚を備え、健全なキリスト教の原理を実践できる女性」⁷⁰⁾と評価されている。最初、オズバーンはインドへの派遣を計画されたが、彼女自身の健康上の問題でこれは実現しなかった。同時期、オーストラリア移民政府のヘンリー・パークス⁷¹⁾から看護師派遣の要請が

届いた⁷²⁾。この要請によってオズバーンは、選任された5名の看護師とともに1867年、オーストラリアへ旅立った。同地における当時の病院は、不潔でだらしない人たちが働いており、医師たちは四・六時中怒鳴り散らすような状況であった。病院の改革はオズバーンの尽力で進められた。オズバーン達は、困難きわまる中で何度も希望をくじかれながらそれを克服して偉大な仕事を成した。1873年には看護師学校設立の計画が進められ、看護体制や・看護教育体制の基礎固めが行われた⁷³⁾。

レベッカ・ストロングは20歳で夫に死別し、1867年に聖トマス病院ナイチンゲール看護師養成学校に入学した。ストロングが入学した頃のナイチンゲール看護師養成学校は、見習い制度が存続し、教育課程という点での進歩は遅々としたものであった。が、親切にすること、注意深いこと、清潔にすること、床ずれに気をつけること、などが徹底していた⁷⁴⁾とストロングは評価している。又、先述したように奨励から学ばせる方法が優れていたとの発言も見られている。他方、彼女は体温測定を実施したときに、それは医師の仕事であるとこっぴどく叱られた経験をしていた。看護師がその位置を獲得するまでには相当な気力と時間を要した。ストロングは卒後、イギリス南部にあるウィンチェスター病院に派遣された。彼女は看護教育で予備課程を作った最初の人物であり、看護師の国家登録制度を熱心に推進した。

アンジェリック・ルシル・プリングル⁷⁵⁾は、ナイチンゲールに一番かわいがられた。彼女もまた、ナイチンゲールを母親のように慕ったとされる。プリングルは1868年、22歳で聖トマス病院ナイチンゲール看護師養成学校に入学した。彼女は利口で良心的な特性を有しており、かなり評判が良かった。1872年にスコットランドのエジンバラ王立病院に副婦長として派遣され、その後、婦長として11年間、同病院で働いた。1887年にプリングルは、聖トマス病院に着任した。着任時、同病院における看護教育は大層進歩したと感じたが、ちょうど、国家登録制度問題⁷⁶⁾が引き起こされていた。プリングルは終生ナイチンゲールの考えと足並みを揃えた。

レイチェル・ウィリアムズ⁷⁷⁾は1871年に聖トマス病院ナイチンゲール看護師養成学校に入学した。彼女は頭がよく、看護の理論面・実践面ともにうまく把握した。が、彼女自身は学校や病院で

の理想が欠けている事実がっかりしていた。しかし、プリングルの病棟に派遣されて、医師も患者についての助言を得るほどであったことから、自分の仕事の手本にしたと語っている⁷⁸⁾。エジンバラ王立病院でプリングルの病棟の副婦長として働いた後の1876年、セント・マリー病院の婦長として就任した。就任時のナイチンゲールの推薦状には、看護の訓練者・教育者として優れた能力があると書かれた。その上で彼女は、嫉妬・けちくささなどを超越した高貴な性格をそなえ、特記すべき知性の持ち主である⁷⁹⁾と評価された。ナイチンゲールが特に深い愛情を持ったとされるのは、このレイチェルとプリングルであった。二人は40年近く親友であり、ナイチンゲールは二人の幸福に最大の関心を寄せた⁸⁰⁾。レイチェルは後述するフィッシャーと協力して、1877年に『病院看護師へのヒント』という本を書いた。同著は看護の手引き書として一番古いものである⁸¹⁾。

アリス・フィッシャー⁸²⁾は、1875年に聖トマス病院ナイチンゲール看護師養成学校に入学した。聖職者であった父親は、娘を文化的で宗教的な雰囲気の中で彼女を育てた。彼女は入学前の1873年に『輝き強く、命短し (Too Bright to Last)』と『彼の女王 (His Queen)』という二編の著作を出している。入学後のフィッシャーに対するナイチンゲールは、口数が多く、誇張がある。著作家。但しルールは守る。そしてクロフト氏の講義を受ける能力はある⁸³⁾と評価した。訓練終了後、彼女は、エジンバラ王立病院に派遣され、プリングルの病棟で働いた。1876年にはニューキャッスル病院に赴任。看護水準の改善に努めた。そして、1882年にはオックスフォードのラドクリフ病院に赴任、看護制度の改善を行った。次に、ヴァーミンガム総合病院に赴任し、ここでも看護制度の改革と正規の看護師学校を設立した。1884年には、アメリカ、フィラデルフィアの3000床もの大病院であるブロックリ病院からの要請によってアメリカに旅立った。この病院では1883年に看護師学校を設立することを決めていた。その責任者が必要であった。ブロックリ病院でフィッシャーは、行く手にあった障害の全てを克服し、6ヶ月のうちにこのマンモス病院の看護全体を完全に手中におさめた⁸⁴⁾。フィッシャーは1876年から1888年にかけて四つの大総合病院で看護業務の再組織を行った⁸⁵⁾とされる。

ナイチンゲールは常に見習い生たちを公平に

扱ったとされるが、特にナイチンゲールに好まれた者、好まれない者は存在したようだ。が、彼女たちは教育終了後、それぞれ自己の教育観・看護観を持ち新たな活動を目指した。そこには看護の学習終後のそれぞれの創造的な姿勢と、その伝授された基本的な姿勢の双方が交錯し、個人の看護への情熱となり、その情熱が実践となり、その看護実践を通してナイチンゲール看護師の評価を高めていった。そして、その実践は女性が社会的に有用であるとの証明につながったのである。その成果はナイチンゲールにとっても満足のいくものであったろう。

彼女は、見習い生に対する書簡の中で「最近、有名な医学雑誌にナイチンゲール看護師について書かれているのを読みました。小説の中で看護師を、酒のみで下品で無知でむちゃくちゃな老女、かのギャンプ婦人のごとくに戯画化する時代は過ぎたという記事だったので。そして更に、小説に書かれるナイチンゲール看護師は、活動的で有能で賢明な看護師であろうと書かれていたのです。」⁸⁶⁾と書いている。この記述はナイチンゲールの構想した看護教育が対立を見せていた医学界にも認められてきた事を示している。ナイチンゲールが述べたギャンプ婦人というのは、チャールズ・ディケンズ⁸⁷⁾の著作『マーティン・チャズルウィット』⁸⁸⁾の中に登場する品性の卑しい大酒のみの看護師のことであり、彼は作品を通して病院看護の実態を辛辣に批判していた。

社会学者トレヴェリアンはナイチンゲールが女性に教育を施して良質の看護師を生み出した事から、他の分野でも女性にシステム的な教育を施こそうという試みが成されるようになり、実質的に女性は社会に解放されたと述べた。そして、従来、弱々しく男性に保護されなければ生きていけないような女性が理想的女性像であったのが、ナイチンゲール以降、女性であっても社会で役に立つ女性が理想的であると考えられるようになったと述べている。

そして、その教育は、近隣諸国のスコットランド、アイルランドというような国、あるいはイギリスの植民地であったオーストラリア、インド等にも広まった。その他、直接、間接を問わず、その形式が伝わったのは、文化として交流のあったカナダ、アメリカ、ドイツである。そして日本でも、明治維新以降、わが国に押し寄せた西洋文化の波の中で看護教育も導入されたのである。そこ

で、次項ではナイチンゲール方式を導入したアメリカ、インド、ドイツ、日本における看護教育の概要について論じる。

2. ナイチンゲール方式の普及

1) アメリカ

アメリカは南北戦争の後に看護教育開始が具体化した。1776年、アメリカはイギリスからの独立を宣言した。1783年にイギリスはパリ条約に調印し、アメリカの独立を承認した。しかし、アメリカは独立後も政治形態、教育、思想面では常にヨーロッパに目を向けており、特にイギリスとは親密な関係を維持した。1861年にアメリカで内戦が起きた。それは奴隷解放運動をスローガンにした南北の対立であり、南北戦争と呼ばれた。北軍のリーダーはエイブラハム・リンカーン⁸⁹⁾である。

アメリカで起きた奴隷解放運動は、イギリスでは早くから思想家達を中心に展開されていた。ナイチンゲールの極身近には、母方の祖父ウィリアム・スミス⁹⁰⁾も政治家として活動する一方、奴隷解放主義者として知られている。イギリスにおける博愛主義運動の一貫である奴隷解放運動、貧民救済運動はアメリカにもたらされ、これがハリエット・ピッチャー・ストウ⁹¹⁾達の運動として展開された。奴隷問題を焦点とする南北対立の中で、南部十一州が連邦を脱退して、アメリカ南部連合を結成し、連邦側はそれを阻止し、連邦を守ろうとしたもので南北戦争とよばれた⁹²⁾。ナイチンゲールも著作『看護師と見習い生への書簡』⁹³⁾の中で、ストウ夫人との交流の事実を述べ、ユーナの運動を展開しましょうと見習い生達に投げかけている。

この南北戦争の際、ワシントンの陸軍省よりナイチンゲールに対して、病院の組織と負傷兵の看護についてアドバイスを求めてきた。ナイチンゲールのクリミアにおける兵士の状況改善に関する記事は、ハリエット・マーティノウ⁹⁴⁾を通じてアメリカに配信されていた。1861年9月20日付のマーティノウからナイチンゲールに宛てた手紙によれば、彼女たち二人の共同の仕事『イングランドおよび彼女の兵士たち (England and her Soldiers)』はアメリカの医学雑誌に掲載され、繰り返し読まれているとのことであった⁹⁵⁾。アメリカの戦争大臣私設秘書であるサイモン・キャメロン (Simon Cameron) からナイチンゲールに宛てた手紙には、ナイチンゲールの文書が非常に熱

烈に受け入れられた⁹⁶⁾と記述されている。『看護・医療の歴史』にはドロティア・リンド・ディクス⁹⁷⁾が、1861年6月10日付で陸軍大臣から陸軍看護師部隊の編成補充の権限と資格が与えられたと記述されており、4月30日付で陸軍大臣の奉仕活動の許可証が与えられた⁹⁸⁾と記述されている。また、マーティノウはナイチンゲールへの手紙でディクスについても触れ、精神障害者のケアをしている女性であると説明を加えると同時に、アメリカ人の素晴らしい感性について触れつつ、ディクスについて大きなエネルギーを有した女性である⁹⁹⁾と評価している。南北戦争中、献身的なシスターやボランテニア達の活動によって傷病兵の看護が成されていた。この中にはクララ・バートン¹⁰⁰⁾なども含まれた。

ディクスの部隊で看護に当たったジョージアナ・ウールセイ¹⁰¹⁾は、「初めから見ていない人には、これらの看護女性がどんなに多くの反対と悪意、そして薄情に耐えねばならなかったを分かる人はいるまい」¹⁰²⁾と述べ、いかに軍医たちの荒々しさに耐え、様々な障害を克服しなければならなかったかについて述べている。南北戦争中に従軍したアメリカ女性達も、ナイチンゲールがクリミア戦争で経験したような問題に直面したことになる。軍医たちによる劣悪な医療体制がそこにはあった。アメリカもまた、この戦争の経験を通して、平時から女性達に看護に関する教育をすることの必要性を感じ、その事によってより良い看護が実践されるというナイチンゲールの考え方を理解するに至ったのであろう。すなわち、アメリカ女性達も戦争の経験によって学習したのである。

南北戦争の経験を契機に1871年、雑誌『レディー・ナース』に看護師は専門的知識を基に、十分検討したプログラム下で教育される必要があるとの記事が掲載された¹⁰³⁾。翌年の1872年にはボストン、ニューイングランド病院に初めて1年コースの看護師養成学校ができた。この翌1873年、ボストン、ニューイングランド病院の看護師養成所は第一回目の卒業生を出した。この中にリнда・リチャーズ¹⁰⁴⁾がいた。以降、アメリカに以下に述べる3つの看護師養成学校が設立され、正式にナイチンゲール方式による看護教育が始まった。

- (1) マサチューセッツ総合病院のボストン養成学校 (Boston Training School)
マサチューセッツ総合病院 (Massachusetts

General Hospital) では婦人グループによって看護師養成学校設立の企画がなされた。養成学校設立のために設置された委員会は高い知性と社会的知名度のある人々で構成された。病院の理事やスタッフは看護師の教育に賛成ではなかったが、委員会の手前学校問題を考えざるを得なかった。委員会はナイチンゲールとトーマス・ラズボーン(Thomas Rathbone)に、看護監督を見つけてくれるように依頼をするが良い人選がえられなかった。そこでアメリカで初めてのトレインドナースであるリチャーズを選任した。

リチャーズは1874年から1877年までマサチューセッツ総合病院のボストン看護師学校で教育を行った。同年、4月から11月までイギリスのエジンバラ王立病院の看護師学校で教育を受ける機会をえた。その時、ナイチンゲールに直接会うことができた。リチャーズに会ったナイチンゲールは、王立病院総婦長のプリングルに「私は彼女に会いましたけれども、希に見る立派な人物であると感じました。彼女が私達から学ぶのと同じくらいに、私達は彼女から学ぶものがあると思います。」¹⁰⁵⁾と手紙を書き送っている。イギリスから帰国後、リチャーズは、ボストン市立看護師長兼看護学校監督となり、後進の教育に当たった。この市立病院では様々な問題を抱えていたが、彼女は常に鋭い見識でその問題解決にあたり、あらゆる反対勢力の中で、最善を尽くした。

1885年にボストン婦人伝道局から、日本への看護教育の件が持ちかけられた。リチャーズは、早速この申し出を受け、日本への赴任に踏み切ったのである。1886年1月に日本に到着したリチャーズは、4年間、京都看病婦学校で見習い生たちの教育・指導に当たった。リチャーズを、日本派遣に向けて尽力したベリーも、彼女の仕事に賛辞を送っている。『看護の歴史 (History of Nursing)』¹⁰⁶⁾には、日本におけるリチャーズの様子を写真入りで紹介している。日本から自国へ帰国した後、リチャーズは、フィラデルフィア訪問看護協会の監督となり、そのほか、アメリカ各地の数多くの病院で看護師長や看護学校の校長を兼任した。リチャーズは、アメリカ及び日本での教育実績から、看護師を養成するという試みが成功だったことを納得させるに十分な仕事をしたと評価されている。

(2) ニューヘブン病院のコネチカット養成学校 (Connecticut Training School)

ニューヘブン病院 (New Haven hospital) は、看護師養成実現のために委員会を設立した。委員会は後述するギル・ワイリー¹⁰⁷⁾の看護学校に関する報告書を基に検討を加えた。結果、同委員会は看護師養成事業を企画することは病院自体にとって得策ではなく、教育の場としての病院を備えた別組織の学校をつくるよう勧告した。ナイチンゲールの看護教育思想を研究してきたフランシス・ベーコン¹⁰⁸⁾が学校計画を練った。彼の妻ジョージアナ(先述したジョージアナ・ウールセイ)は非常に積極的な女性であり、若いころから政治や社会問題に関心をよせ、強烈的な奴隷制度反対論者であった。彼女は南北戦争中には献身的に傷病兵の看護にあたり、野戦病院を訪問したりしている。初期のころのアメリカの病院や看護学校のバイブルとして愛用され、また、我が国の看護教育にも活用された『家庭および一般向け看護のためのハンドブック』は、彼女が1879年(明治10年)に書いた著作である。

大山捨松¹⁰⁹⁾が看護師の教育を受けたのはこの学校である。そこでの教育は衛生学の基礎知識や技術訓練、そして調理場での実習があった。コネチカット看護師養成学校はニューヘブン病院に付設されたが、生徒は4名であった。その病院関係者の一部は看護学生たちに対して計画を失敗させるような様々な妨害をした。しかし、医師たちは看護師のこの仕事に好意的で、最初から学校について熱心であった¹¹⁰⁾。1923年、コネチカット看護師養成学校は創立50周年を機に、エール大学看護学部として発展、学部長にアニー・ワーヴァートン・グットリッチ¹¹¹⁾を迎えた。グットリッチは第一次世界大戦中に海軍看護師部隊の隊長であり、陸軍看護師養成所の創設者でもある。

(3) ニューヨーク、ベルビュー病院のベルビュー養成学校 (Bellevue Training School)

1736年(天文1年)にペスト収容所として建てられたベルビュー (Bellevue) 病院があった。1811年にニューヨーク市はベル・ビュー (Belle Views) と呼ばれた場所に病院を建て、ベルビュー病院 (Bellevue) と命名した。この病院は病院と救貧院の両者を兼ね、救貧院に収容された女性達が看護のケアを行っていた。病人はほとんど放置され、無視され、その汚さと乱暴な取り扱いがぞつとさせられるような状況にあった。1871年にこの様な状況が報告され、看護師の教育を開始するよう求めた女性達が看護委員会を結成した。が、医

療評議会の委員達がこの問題に介入することに賛成の意を示さなかった。看護師の教育を支持したのはジェームス・ボーウェン (James Bowen) という将軍ただ一人であった¹¹²⁾。

その後、ギル・ワイリーはナイチンゲールに直接会って助言を得ながら、彼女の教育方法に沿って教育を開始した。同校の卒業生にはイザヴェル・ハンプトン・ロブ¹¹³⁾がいる。ロブは、後にナイチンゲールとも十分な交流を保ち、指導をとおしているが、ナイチンゲールと根本的に違った点は、ナイチンゲールが「看護師登録制度、看護師の免許制度など、とくに最小限度の実習しか要求せず、また単なる文字や言葉の上だけの進歩を正しい知識や実践を育む材料として利用するのではなく、それ自体を個人の実践上の熟練に代理させるようなもの、すべてこのようなものは墮落の傾向にあるものと言えるでしょう。」¹¹⁴⁾と看護師の資格試験制度や、身分登録制度に根本的に反対の態度を示し、看護師自身が自分の中に進歩するための体温計を持つべきであるとしたのに対し、ロブは法律に寄る規制が、無資格看護師から患者を守り、同時に看護師のレベルをたかめることになるという信念を持っていたことである。ロブの信念は、ジョンズ・ホプキンス看護師学校の卒業生であるメアリー・アデレード・ナッティンゲ¹¹⁵⁾に引き継がれ、アメリカ看護師界の組織作りやその教育改革に実力を示した。

以上、アメリカにおいては、1873年の時点で3つの看護師学校が設立され、時代の流れの中で病院と学校とが分離され、大学教育へと発展している。ヨーロッパの他の国々のように聖トマス病院ナイチンゲール看護師養成学校の卒業生が直接的に関与したという事実はないが、基本的にはナイチンゲールの意見を参考にしながら、また、その方式を取り入れながら、社会の要請と実情に合わせて看護の教育方法を変えていった。ちなみにこのアメリカでの教育方法はアメリカ方式¹¹⁶⁾と呼ばれている。

2) インド

イギリス人でナイチンゲール程にインドの事に関心を向け、心を痛めた女性はいなかったのではなかろうか。イギリスの植民地政策でインドは、東インド会社¹¹⁷⁾を中心としてその政治的支配下にあった。ナイチンゲールと「女性の権利」運動で論争したジョン・スチュワート・ミル¹¹⁸⁾も一

時期、この会社に就職していたことがある。独自の軍隊を持つようになった東インド会社の勢力は絶大なものがあつた。イギリスの資本家達、ほとんど奴隷状態の現地のインド人、こうした二層状態の中でインド人達はその収入の大半が搾取され、貧困と飢餓状況の中で、その生命が失われつつあつた。植民地政策におけるイギリス人による長い圧政の中で1857年、イギリス政府に対する反乱が起きた。同年、5月にミアラトで始まったインド人の反乱に対する鎮圧は、恐怖から生じた極度の凶暴さを持って押し進められた¹¹⁹⁾のである。ナイチンゲールはインドのイギリス陸軍に関しても、クリミアと同じく不必要な死亡事故が起きているのではないかと疑念を抱き、1857年に「インド駐在陸軍の衛生状態に対する勅撰委員会」を組織した。彼女は早速調査を開始、3年がかりでこれを収集、分析した。ナイチンゲールはインド駐在軍に要求される衛生活動改良に関する覚え書を完成させ、1863年『インド陸軍の衛生状況に関する勅撰委員会によって考察を委託された駐屯地報告書中の調査報告に関する所見』¹²⁰⁾を勅撰委員会委員長である下院議員エドワード・ヘンリー・スミス・スタンレー卿¹²¹⁾に送り付けた。しかし、政府はインドに関して数々の難題を抱え多くの批判に晒されていたので、この報告書によって更に窮地に立たされる¹²²⁾ことを控え、様々な政治的駆け引きの中で結局、改革案は廃案となり、ナイチンゲール達の努力は無に期したのである。

1863年5月～10月のマクミランマガジンには『インド人の死と生命』¹²³⁾、同年、8月15日付けのワンズ・ウィークには『フローレンス・ナイチンゲールの最新の慈善団体』¹²⁴⁾、という記事がそれぞれ掲載された。インドにおける兵士の問題は感染症であった。4つの感染症—すなわち発熱、赤痢、肝臓病、コレラ等の全インドで並外れた死亡状態を引き起こしていた。当時のイギリスでは1,000人につき10人の死亡であったが、インドでは1,000人につき67人が死亡した。この67人の死亡のうち、実に58人がこれらの4つの感染症による死亡であった。そして、これらは全て温度、水、腐敗物が原因であった¹²⁵⁾。インドにおける衛生改革は絶望的かと思われた。ところが1863年11月になって、インドの総督が急遽し、その後任にジョン・ローレンス卿¹²⁶⁾が選任された。彼は任地に赴任する前にナイチンゲールに助言を求めてき

た。ナイチンゲールは、全インドの衛生問題を要約した文書をローレンス卿に提供した。しかし、インドにおける衛生改革は彼の熱意程には進展せず、業績ははかばかしくなかった。

1865年、ロバート・コーネリア・ネピア卿¹²⁷⁾がマドラス総督に任命された。ナイチンゲールは前任者のローレンス卿に助言したのと同じ提言をネピア卿にも成した。ネピア卿はナイチンゲールの考えていたインド陸軍の衛生改革に非常に関心を持ち、道路や学校の建設、下水設備や灌漑設備の着工、刑務所や病院の改築等堅実に業績を上げた¹²⁸⁾。気を強くしたナイチンゲールは、続けて中断していた懸案事項、すなわち、病院に女性を導入する件を英国陸軍看護師規則に基づく『インドの病院における看護システムについての助言』¹²⁹⁾をネピア卿に提示・提案した。提案された“インドの病院における看護システムへの助言”はネピア卿夫人によって実行に移された。彼女の指導によって、インドの病院に女性看護師を導入する実験的な試みが実現されるに至ったのである。

ここにナイチンゲールの後押しでインドの衛生問題の改革運動がはじまると共に、看護教育に関しても、その基礎が出来上がろうとしていた。しかし、本国陸軍省とインド省との関係悪化もあって、その改革は熾烈極まりないものがあつた。加えて、ナイチンゲールの提唱する“新鮮な空気”と“陽光”，この日常生活上の原則は看護教育における基本原則である。ゆえに、インドの衛生の改革でも本国同様に提言がなされた。しかし、この提言は、ナイチンゲールの無知さがもたらしたものであるとリットン・ストレイチー¹³⁰⁾は辛らつに批判した。

ナイチンゲールがインドの常識では熱風を避けるために窓を締めきるという現地の実情も知らないで、又、現地の知恵を無視した提言をしたと強く非難をしているのである。そして、彼は、その国土特有の熱風に対するナイチンゲールの無配慮は、ナイチンゲールが、その経験だけを頼りに理論を展開したのであり、インドにおける彼女の教訓はその極致であると述べ、熱風の持つ意味を知らないナイチンゲールは無知であつたと述べている。加えて、むなししいことにナイチンゲールは簡単に人の言葉を信用しない人であり、ただ彼女自身が経験で得たことのみを一つの価値として信じたと述べている。

彼は持論の妥当性としてナイチンゲールが、ルイ・パスツール¹³¹⁾やジョセフ・リスター¹³²⁾の発見が後年発表されても、決してそれらの論文を読まず、あまつさえ、彼等のことを“病原菌狂信者”(Germ Fetish)として彼らを取り扱ったと述べている。パスツールはフランスの細菌学者である。彼は“近代細菌学の父”と呼ばれ、ロベルト・コッホ¹³³⁾の研究を発展させ、ワクチンによる予防接種を創始した。又、肺炎菌やレンサ菌の発見も彼の業績である。リスターは“近代外科学の父”と呼ばれ、石炭酸を消毒液に使用して外科手術法を開拓し、術後の感染防止に貢献した。ストレイチーはナイチンゲールが両者の業績を認めず、彼等のことを“病原菌狂信者”の烙印を押してしまったと述べる。彼はナイチンゲールが病原菌と感染とを関連付けて考えようとしなかったことを非難しながら、目に見えるもの以外、何も信じない単純な人間であると批判した。しかし、ナイチンゲールがいかにインドに対して熱心に提言をしたかについては、『インド駐在陸軍の衛生』¹³⁴⁾、『インドにおける生と死』¹³⁵⁾、『インドの病院における看護』¹³⁶⁾などからも明らかである。

彼女はスクタリで新鮮な空気や陽光が、病気の回復に効果的であることを経験した。インドにおける衛生問題は本国におけるものよりはるかに深刻なものであるが、総じてその必要性はイギリスと変わらない。新鮮な空気が病人に良い結果をもたらすことを経験したナイチンゲールはインドの衛生問題について、内容的にはほぼイギリスと同様の提言をしている。しかし、現地の実情にあわせて考慮するようにとも提言している。現地特有の宗教的感覚もさることながら、女性がおおっぴらに陽光を浴びて生活することが制限されているということもあって、看護師として社会で活動することは認められないことであつたらう。ストレイチーは行動という言葉を使うならば、恐らくナイチンゲールは経験主義者(Empiricist)であつたと述べている。

一般に哲学が経験を超越する理性とか論理性を根本原理とするのに引き換え、経験の哲学(Empirical Philosophy)では、あくまでも経験に根拠を求め、全ての知識が経験的起源より発生したものであることを主張する哲学である。イギリスのジョン・ロック¹³⁷⁾やアメリカのデューイ等はこの立場である。彼女は原因と結果の関係において一方があがるか下がるかすれば、他方の結

果も変化すると、物事の因果関係について論じている。したがって、ナイチンゲールが決して、目に見えるもの以外、何も信じない単純な人間であったとは言い難い。ナイチンゲールほどに自然科学上の現象を、原因と結果との関係で捉えようとした者はいなかったであろう。ナイチンゲールは疫学的な調査も含め、インド人の生死に関して最も敏感に反応した人物であった。しかし、インドにおける衛生問題の改善や看護法の定着に関しては、日本におけるよりはるかに困難な事業であった。

1898年にナイチンゲールのもとに、インドのイスラム教徒の最高指導者アガ・カーン¹³⁸⁾が訪れている。ナイチンゲールは公衆衛生という側面において、都市と田舎にどのような変化が生じたかを説明したが、彼はあまり、理解しなかったようだ。逆にナイチンゲールはアガ・カーンから「あなた自身は進歩したのか？」¹³⁹⁾と質問され、答えに窮したと記述されている。アガ・カーンにとっての進歩は、神を一層信じるようになることであった。ナイチンゲールは彼が衛生問題よりも神への信仰心により強い関心を持っていたと述べている。ナイチンゲールはアガ・カーンに対し、「彼はとびっきり魅力的な人物であるが、およそ、衛生という概念を教え込むことは不可能である。」¹⁴⁰⁾との結論をくださった。文化という意味で大きく遅れをとっていた東洋社会で、インドは日本同様、困難な土壌にあったのであろう。

3) ドイツ

ドイツはナイチンゲールが看護の初期教育を受けたカイゼルスウェルト学園のあるところである。学園の創立者はテオドル・フリードナー¹⁴¹⁾というキリスト教の牧師である。ナイチンゲールの著作『カイゼルスウェルト学園によせて』¹⁴²⁾には、その施設の概要が説明されている。そこは神の使い手としての婦人執事のための訓練学校、幼児学校、幼児学校の女教師のためのセミナリイ(師範学校)、孤児院、救護院(アサイラム)などが存在する複合施設である。ナイチンゲールが同著にも述べたように聖ヴァンサン・ド・ポール¹⁴³⁾が設立した慈善修道女会による看護の奉仕活動は、4世紀にも遡ると言われている。十字軍の出兵にあわせて行われた看護奉仕団が、そのままキリスト教伝導の目的とも相まってナイチンゲールの時代にも続けられ、女教師教育及び看護

教育も行った。こうした教育の方法は“母の家(マザーハウス)方式とも呼ばれている。

また、ドイツは、シャトルワースが、その養成に際して参考にした国である。教育者ジョハン・ヘンリック・ペスタロッチー¹⁴⁴⁾の思想をはじめとして教育学を樹立したヨハン・フレデリック・ヘルバルト¹⁴⁵⁾や細菌学者コッホ等、教育・医学の方面では突出した人物を多く輩出している。実際、我が国はヘルバルト派教育学者エミール・ハウスクネヒト¹⁴⁶⁾を、医学者ではベンジャミン・カール・ミュルレル¹⁴⁷⁾、テオドル・エドワルド・ホフマン¹⁴⁸⁾、エルヴィン・ベルツ¹⁴⁹⁾等が招聘され、その学問的向上に貢献している。さらに、1889年(明治22年)の大日本帝国憲法の起草や医学教育など、ドイツを手本にしたものが少なくない。

そして、医療の視点から政治を見ていたルドルフ・ルートヴィヒ・ウィルヒョー¹⁵⁰⁾は、早い時期から病院及び病院の改革に強い関心を持っていた。ウィルヒョウは1866年と1870年の戦争(普仏戦争)で実際に行動を起こす機会を待っていた。病院を改革するためには良い看護職員を訓練することが必要だと考えていたウィルヒョウは、ナイチンゲール方式による看護の教育法を採用することにした。彼は「宗教的な命令とか人間の屑を雇うといった伝統的な方法を続けることは不可能である。看護は人間的な仕事で、ざんげの仕事ではない。適切な要員を訓練することは戦争といった非常時だけではなく、平和な時から始めるべきである。女性もまた男子の病棟での看護を引き受けるべきである。看護学校は病院にくっつけて作るべきである。篤志家の協会はこの分野での先駆的な活動に資金を出すべきである。有資格者の補充には、選抜、奨学資金、一般健康教育の改善が役立つはずである。」¹⁵¹⁾という演説を行っている。彼の演説から考えると、ドイツにおける病院看護の実態はイギリスと変わらず、その問題の解決策として適切な要員を訓練する必要性を力説している。また、この教育は非常時だけではなく、平和な時から始めるべきであるとの主張は、ナイチンゲールと同様な見解である。彼は病院の改革と同様に看護教育にも関心を示したが、時代の流れの中で次第に政治の中枢から敗退した。

実際にナイチンゲール方式によって看護教育が開始されたのは、1886年にヴィクトリア女王の第一皇女、フレデリック皇后¹⁵²⁾がベルリンにヴィ

クトリア慈善病院を建てた時である。同病院には、聖トマス病院ナイチンゲール看護師養成学校で看護の教育を受けたフルマン (Fraulein Louise Fuhrmann) という看護師が責任者として任命された。彼女は就任後、ナイチンゲール方式で看護教育を行ったとされている。しかし、フレデリック皇后の夫であるフリードリッヒ3世¹⁵³⁾の治世は短かった。ドイツではドイツ赤十字社をはじめとして先に掲げた“母の家方式”が圧倒的多数を占めており、ナイチンゲール方式はあまり発展していない。ドイツの政治的指導者であるオットー・エドアルド・ビスマルク¹⁵⁴⁾と、イギリス思想の影響を強く受けていたフレデリック国王夫妻との思想的隔たりは大きく、政治的対立にもなりかねない状況であったと『ヴィクトリア女王の娘』に書かれている。

4) 日本

日本で初めて看護教育が開始されたのは、明治初期初期であり、それは高木兼寛¹⁵⁵⁾によってである。高木は、薩摩藩が建てた医学校 (現在の鹿児島大学医学部) に誘致されたウィリアム・ウィリス¹⁵⁶⁾が校長として就任した後、同医学校の第一期生として入学した。彼はウィリスに師事した後、1873年 (明治6年) に、海軍病院内の海軍医学校に招聘された。海軍医学校にはイギリスの聖トマス病院医学校の出身者であったウィリアム・アンダーソン¹⁵⁷⁾が教授として招かれていた。アンダーソンの推薦を得た高木は、1875年 (明治8年) にイギリスの聖トマス医学校に留学した。

彼が留学した頃の日本は英米主導型であったが、1877年 (明治10年) には西南戦争¹⁵⁸⁾が起き、政治の体制も変っていた。国内ではキリスト教主義的思想から儒教主義思想への転向が繰り返し主張されていた。政局の混乱の中、外地との交流で伝染病も多かった。1882年 (明治15年) に高木は、伝染病患者を収容するために設立されていた東京府病院の一部を借用して民間病院をスタートさせた。これと同時に婦人慈善会¹⁵⁹⁾のメンバーの一人である捨松は、病院参観時に病人の世話をしていたのが看護人ばかりであったことに驚いた。

津田梅子¹⁶⁰⁾と一緒に幼きアメリカ留学を果たした捨松は、先述したコネチカット看護婦養成所で短期間ではあるが、看護の教育を受けていた。捨松を含めた婦人慈善会のメンバーは、高木が設立した有志共立東京病院に対し財政的支援をおこ

なう一方、鹿鳴館でバザーを行い資金あつめをした。そこで、彼女達は“看護婦教育所設立の主旨”という文書を、バザーに参加したメンバーに配布し、協力を求めた。その文書には、不幸にして病気になる場合、医師の力は大きい、看護の力を借りればそれにもまして病気の回復を効果的に促進することが出来る。外国には既に看護婦教育所があり、病人の看護をする者の教育を行っている。よって、日本でも看護婦教育所を設立して欲しいという要望であった。そして、バザーによる収益金は全て高木に渡され、看護婦教育所を設立に向けて財政的支援を行ったのである。そして、1885年 (明治18年) 有志共立東京病院看護婦教育所が開設された。

次に、アメリカから来日していた女性宣教師たちによる看護教育の提唱である。わが国は開国以来、多くの外国人が日本を訪れ、奉仕活動を展開していた。アメリカから来日していた女性宣教師達の中には、既に看護教育を受けた者たちも含まれた。彼女たちによる看護教育の提唱はわが国の看護教育開始に大きく弾みをつけた。大阪における日本プロテスタント宣教師全体会議の席上で、フェリス女学校のメアリー・キダー¹⁶¹⁾は「女性のための仕事の一つで大変重要なものであり、本国の伝導協会の注目に値するものにキリスト教看護婦の養成がある。この事業は大変な設備を必要とするため、私にとっては手強いものであるが、重要なものであり、早く有能な女性達が看護師の仕事に就くように希望するものである。」¹⁶²⁾と述べている。又、大阪梅花女学校のアビィ・マリア・コルビー¹⁶³⁾もこの発言に先だてて、看護教育の重要性を述べている。アビィはすでにアメリカのボストン看護師養成所を卒業して看護師の資格を有している教師であり、1879年 (明治12年) から宣教目的で来日していた。これら、アメリカ女性宣教師達の提唱に呼応して1885年 (明治18年) に設立されたのが京都看病婦学校と桜井女学校付属看護婦養成所である。

まず、京都看病婦学校は、同志社大学の敷地内に設立された看護婦養成のための学校である。同志社大学の設立は新島襄¹⁶⁴⁾である。新島は21歳のとき、密航をしてアメリカに渡り、アマースト大学で本格的な教育を受けた。1870年 (明治3年) には、駐米少弁務使をしていた森有礼¹⁶⁵⁾に出会い、翌、1871年 (明治4年)、森の斡旋で明治政府から密航の罪を許された。新島は在米中、岩倉

使節団の案内役及び通訳として随行した。その後、彼はアンドッパ神学校に入学し、卒業後、アメリカン・ボードの宣教師として1874年(明治7年)に帰国した。『新島襄その時代と生涯』¹⁶⁶⁾には、新島が看護学校を設立した目的が、“看護婦学校設立アピール草稿”として明確に示されている。それによれば、ナイチンゲールのクリミア戦争における傷病兵の看病や看護婦学校の設立について触れ、その活動の根底にはキリストの教えがあると述べ、「今文明諸国二人々カ多分ノ金ヲ投シテ病院、幼院、癲狂院又ハ看病婦学校等ノ設ケアルハ、社会ノ為ニ計ル所ノ純乎タル慈善心乃宗教心ヨリ起コテ、人ヲ助け人ヲ救フヲ以テ目的ト為ス所デゴザリマス、而シテ此目的ハ基督ノ人ヲ愛(セ)ヨト云フ教ニ原因スル訳デゴザル」¹⁶⁷⁾と述べている。つまり、新島はナイチンゲールのキリスト教的愛の実践が看護であると判断し、慈善の心を喚起する目的を持って看護教育を施そうと考えたのである。開設当時、その運営に協力したのが、アメリカの宣教師であったジョン・カッティング・ベリー¹⁶⁸⁾である。その後、同志社では新島の死後宣教師総辞職事件¹⁶⁹⁾がおき、アメリカン・ボードや宣教師との関係が壊れ、看病婦学校の運営・維持が困難になり、佐伯理一郎¹⁷⁰⁾がその運営の責任を担った。

次に、桜井女学校付属看護婦養成所は、その名のおり桜井女学校(現在の女子学院)に付設された。桜井女学校(現在の女子学院)は1876年(明治9年)、桜井ちか¹⁷¹⁾によって東京・麹町に設立された。その理念はキリスト教的主義によるものである。同校は当時のわが国が目指した良妻賢母主義教育とは異なり、キリスト教理念に根ざす人格の養成であり、自由自治の精神を重視、世のために正しい働きのできる女子の育成を基本方針とした。ちかはアメリカ長老教会からの命をうけメアリー・ツルー女史¹⁷²⁾の協力を得て、1879年(明治12年)には高等小学科、1880年(明治13年)、幼稚園を設立した。

桜井女学校付属看護婦養成所の設立に関しては、桜井ちかよりもツルー女史のほうが積極的であり、彼女の意思で始まったものと言えるであろう。その直接的な動機としては、「明治16年にジョン・バラ夫人が病気となった際、看護婦のいない不便さを見にしみて知り、“医術がいかにかけても看護婦のいない国は病人の不幸”との思いより決意したものである。」¹⁷³⁾と書かれているように、

先に宣教目的で来日していたジョン・バラ夫人(Mrs. John Craig Ballagh)が、看護教育の必要性を感じながら他界した為、その意志をツルー女史が引き継いだものである。

同養成所は実習施設を有していなかったために、帝国医科大学第一医院(後の、帝国大学医学部付属病院)で実践教育を行った。特にキリスト教主義思想の強い桜井女学校付属看護婦養成所の看護婦が当時、帝国医科大学第一医院の人的環境に順応できたかどうかという問題、キリスト教主義者に排他的であったわが国の社会状況の反映か、あるいは有資格者のいない時代の帝国医科大学第一医院の医学的基礎知識を有している桜井看護婦養成所の見習い生たちに対する排他的な問題などが起き、帝国医科大学第一医院は後に独自で看護婦講習所を設立し、看護師の教育を開始した。

看護婦養成所設立後、ツルー女史は1887年(明治20年)に新宿淀橋角筈に衛生園を設立した。その趣意書には、第一項 身体虚弱ナル婦女史ニシテ動モスレバ発病ノ虞リアルモノヲ入院セシム之ヲ未然ニ防ガントス、第二項 病後回復ニ至リタルモノヲシテ親切ナル看護ト養生トヲ専ニシノ回復ヲ促進スルニアリ¹⁷⁴⁾と書かれていた。この趣意書にみる限り、衛生園は桜井女学校付属看護師養成所の実習施設を含めた女性達の療養施設である。この施設の運営にはアメリカで医学を学んだ女医岡見京¹⁷⁵⁾が協力した。しかしながら、衛生園は開設にいたっても療養施設としての認可が得られず、実質的には診療所的な役割しか果たせなかった。

最後に、更に為政者が中心となって外国への視察を成し、西洋の文化を吸収しようとした試みの中で1890年(明治23年)に設立されたのが、日本赤十字社看護婦養成所である。日本赤十字社は、国際赤十字の設立精神に影響を受けたわが国の為政者の提唱によって組織された。国際赤十字は戦時や災害時における人道主義的側面から設立された組織であり、それはアンリ・デュナン¹⁷⁶⁾の提唱による。その目的は戦時救護団体を各国に組織し、その組織は平時から相互に連絡を保つことであった。この考えに賛同した12カ国が1864年(文久4年)に調印し、締結が成され、国際赤十字がスイスのジュネーブに設立された。

1867年(慶応3年)にパリで開かれた万国博覧会、1873年(明治6年)にウィーンで開催された万国博覧会に参加した佐賀藩の佐野常民¹⁷⁷⁾は、

赤十字マークのついた救護会の展示物を見て、赤十字の組織に対して大きく心を動かされた。1877年（明治10年）、佐野は大給恒¹⁷⁸⁾と共に博愛社設立の請願を岩倉具視¹⁷⁹⁾に行った。明治維新前後から、内乱状態になったわが国の、特に熊本の地は佐賀の乱¹⁸⁰⁾あるいは西南戦争などによって戦場と化していた。有栖川宮熾仁親王¹⁸¹⁾から設立許可が得られた博愛社は熊本の地で最初の産声をあげ、救護活動が開始された。1881年（明治14年）、大山巖¹⁸²⁾陸軍卿と共に欧州視察旅行より帰国した橋本綱常¹⁸³⁾も、国際赤十字設立という諸外国の活動に心を動かされた。

国際赤十字の活動に心を動かされた橋本は、佐野と共にジュネーブ条約加盟の必要性を明治天皇に申し上げ、1886年（明19年）には、博愛社病院を設立した。この病院の院則には「院則ハ第一軍隊ノ負傷者を救護スベキ看護者ヲ養成シ第二戦時ハ本院ヲ以テ負傷者ノ予備病院ニ供シ第三平時ハ民間ノ病者ヲ治療シ以テ看護人ヲシテ実地ノ研究ヲナサシム¹⁸⁴⁾」と規定されている。この規則にみる博愛社病院設立の目的は、第一に看護師の養成目的、第二に戦時中の負傷兵を収容、第三に平時は一般の患者を収容して治療にあたり、こうした医療行為を通じて研究等の教育機関とすることである。1887年（明治20年）、彼らの提言が受け入れられ、博愛社改め、日本赤十字社が設立された。佐野や橋本とともに赤十字社の創立に協力した石黒伴憲¹⁸⁵⁾である。1887年（明治20年）、赤十字社は天皇陛下のお声がかりにより、既に設立されていた博愛社を日本赤十字社と改名、日本政府の正式な組織として発足、組織の充実を図った。以上、明治期初期、ナイチンゲール方式を採用した我が国の看護教育の始まりについて論じた。明治期は政治的・思想的な転換があり、動乱の時期ではあったが、そうした時期にナイチンゲール方式による看護教育が開始されたことは特筆に値するが、その後の発展経緯は今日の看護教育に影響を与えた。

■ 結 語

本論ではナイチンゲール方式と呼ばれる教育方法の特徴とその教育の広がりについて特にアメリカ、インド、ドイツ、日本についての概要を示した。まず、ナイチンゲール方式の特徴は、自己訓練する精神修養の方式を、看護教育の中に導入し、マトロンと呼ばれる理想的な看護師像を組織の頂

点に位置付け、一つの目標を示したことである。次に、規律のある道徳的な環境に寄宿舎をおき、優れた監督官によって秩序正しく管理し、看護師に必要な基礎知識を習得させたこと、臨床経験を大きな学習の機会とし、そこで観察した事や経験したことを記録させる事によって自己の看護を総括、評価させ、看護を科学的に展開させようとしたこと、臨床経験の前に医学的知識を学ばせ、看護の対象である患者の支援法につなげたこと、そして何よりも看護総監督の位置づけや見習い生の受け入れから評価の方法まで規律ある訓練のための規則を系統的に作ったことである。看護活動は医師や弁護士のように個人で活動するものではなく、多くが一つの集団として行動する場合が多い。その意味合いから考えると、看護活動をする者が一つの組織を構成し、秩序ある行動ができるようにするには徹底的に訓練する必要がある、その集団には規律は絶対に不可欠だったのである。その意味でナイチンゲールは徹底的につくる教育に専心したのである。その教育が評判の悪い看護師を一掃することにつながったと考えられた。この教育の評価が高まったことから、イギリス国内はもとより、イギリスと関係のあった国々に広まった。

本論ではアメリカ、インド、ドイツ、日本でナイチンゲール導入の経緯について論じた。アメリカでは看護教育を積極的に取り入れ、独自の創意を持ち、アメリカ方式に発展させた。ドイツは基本的なところで思想的に噛み合わずナイチンゲール方式は余り発展しなかった。インドはわが国同様、宗教的な問題があり、余り発展していない。そして我が国もナイチンゲール方式を採用したが、病院付属の徒弟制度的な方式が存続している。それぞれの国々は、その思想的経済的背景の中で、それぞれの道を模索しつつ、今日があることは歴史が証明する。

ナイチンゲールが求めて止まなかったこと、それは無為に生きている女性達に、知性と道徳的な価値規範と情熱を持った女性として蘇らせる事であった。しかしながら、こうした絶対的な強制力を持った教育は個人の行動のみならず、思考をも制限する恐れがあった。そこで問題になるのが人格の持つ意味である。人格が倫理的行動力および自己決定力を有する個人に比類なき尊厳があるとしたら、人格教育は単純に寄宿舎に入って規律による盲目的な性格矯正を指すものでもない。看護

教育がその技の獲得のみならず、人格教育をも考えた教育をすればしたなら、ナイチンゲールの創造した教育を伝承巢布身ならず、看護の本質を見極め、新たな教育の創造を目指すべきであろう。実際、それこそがナイチンゲールが述べた、明確な

目的は実現していかなければならないが、その目的を実現していくための道は、大いに発見していかなくてはならないということの真実であると筆者は考える。

註釈

- 1) Florence Nightingale (1858) ; Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals. (湯槇ます他訳；ナイチンゲール著作集第一巻，女性による陸軍病院の看護，p.39，現代社，1985年.)
- 2) 佐々木秀美著；ナイチンゲールの看護観－その目的実現のための教育方法－Nursing is not an Art but a Character－，看護学統合研究 Vol.14, No.1, pp.46－66, 2012年.
- 3) Florence Nightingale (1860) ; Note on Nursing, Scutari Press, 1992.
- 4) Florence Nightingale (1860) ; 前掲書 3) , p.26.
- 5) ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau 1712－1778) ; フランス啓蒙期の天才思想家。彼の活動はきわめて多面的で、その主権在民、自由平等、愛国などの思想がアメリカ独立やフランス革命に理論的基礎を与えたのみでなく、社会主義、人格主義、永久平和の理想、ヒューマンズム教育、ロマン主義など、近代を形成する先駆者である。人間の自然の善性を原理に教育は宝の詰め込み出なく、ただ被教育者の自然的能力の開花を妨げるべきものの除去を目標とする「消極教育」の主張した。知的早期教育の否定、徳育と体育の重視、実物教育、教育の手段化に反対してまず人間たれと説くこと、など教育学上画期的な見解を示し、カントにも大きな影響を与えた。
- 6) ルソー著，本田喜代治訳；人間不平等起源論，p.25，岩波文庫，1992年.
- 7) ルソー著，本田喜代治訳；前掲書10)，p.37.
- 8) フリードリッヒ・エンゲルス (Friedrich Engels 1820－1895) ; ドイツの社会主義者.
- 9) カール・マルクス (Marx Karl 1813－1883) ; 国際的共産主義の祖。ボン大学とベルリン大学で法律を学んだ。1848年に共産党宣言を完成させ、その中で国家は抑圧の道具であり、宗教や文化は資本家階級のイデオロギーだと攻撃した。1849年にロンドンに落ち着いてから経済学を研究し、『資本論』を書いた。
- 10) 佐々木秀美著；ナイチンゲール教育思想の源流 日常生活は心に問いを抱かせ、知性はその問いに答を要求する，看護学統合研究，Vol.12, No.1, pp.42－67, 2010年.
- 11) 佐々木秀美著；ナイチンゲール精神的危機から自立へのプロセス，看護学統合研究，Vol.12, No.1, pp.24－41, 2011年.
- 12) 佐々木秀美著；ナイチンゲールイギリス陸軍を改革する－学習（経験）したことから学習せよ，看護学統合研究，Vol.13, No.1, pp.29－48, 2011年.
- 13) 佐々木秀美著；ナイチンゲール女性の専門職を創設する－19世紀は女性の世紀，看護学統合研究 Vol.13, No.2, pp.16－41, 2012年.
- 14) Lucy Ridgely Seymer; A General History of Nursing, (小玉香津子訳；看護の歴史，医学書院，1978年.)
- 15) Florence Nightingale (1858) ; 前掲書 1) , p.59.
- 16) Florence Nightingale (1865) ; Suggestions on a System of Nursing for Hospitals in India, (湯槇ます他訳；ナイチンゲール著作集第三巻，インドの病院における看護，pp.437－462，現代社，1985年.) 本規則はインドの病院における看護の提言に付則として添付されている提言の中で、ナイチンゲールは修正を加えて使用可能であろうと述べているから、先に実施したナイチンゲール基金における看護師規則と同一であると考えられる。
- 17) Florence Nightingale (1858) ; 前掲書 1) , p.441.

- 18) 綴り込み帳；ナイチンゲール著作集第三巻 pp.447-448に添付してある付録8)
- 19) Florence Nightingale (1882) ; Nurses, Training of, and Nursing the Sick, (湯槇ます他訳:ナイチンゲール著作集第二巻, 看護師の訓練と病人の看護, p.80, 現代社, 1985年.)
- 20) Florence Nightingale (1888) ;To the nurses and probationers trained under the “Nightingale Fund”, (湯槇ます他訳；ナイチンゲール著作集第三巻, 看護師と見習い生への書簡, p.394, 現代社, 1985年.)
- 21) ゼーレン・オービエ・キルケゴール (Soren Aabye Kierkegaard 1813-1855)；デンマークの宗教思想家. 真のキリスト者を求め, 信仰によって神の前に立つ人であり, そこに真の人間の生き方がある. 人間は常に真の自己たらんと欲する限り, 永遠者を求めて努力する必要がある, その努力の過程が実存するという事である.
- 22) キルケゴール著, 芳賀檀訳；愛について, p.108, 新潮文庫, 1952年.
- 23) キルケゴール著, 芳賀檀訳；前掲書23), p.225.
- 24) ケイ・シャトルワース (Kay Shuttleworth 1804-1877)；医師でもあり, 救貧法行政官であった. ナイチンゲールの友人であるチャドウィックは彼の友人でもある.
- 25) Florence Nightingale (1882) ;前掲書19), p.80.
- 26) ミッシェル・フーコー (Michel Foucault 1926-1984)；フランスの哲学者. 実証的な科学的思考とも哲学的存在論的違った無意識的文化の体系に思考の基底を求め, これをエピステーメと呼んでその変化をヨーロッパ思想の根底に探り, 人間諸科学の考古学を目指した.
- 27) Michel Foucault (1975)；Naissance De La Prison, (田村俣訳；監獄の誕生, p.154, 新潮社, 1977年.)
- 28) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale; Cassandra/Suggestions for Thought, p.205, Pickering & Chatto Limited 1991.
- 29) エミール・デュルケイム (Emile Durkheim 1858-1917)；フランスの社会学者であり, 社会学創始者の一人. ボルドー大学教授を経てソルボンヌ大学教授. 社会学の対象を個人の心理現象や生活現象に還元しえない独自の集団表象と規定し, 集団表象は個人を拘束する外在的事実であって, 物として客観的に取り扱うべきであるとする社会学の方法論を確立した.
- 30) デュルケイム著, 佐々木交賢訳；道徳教育論, 誠心書房, 1974年.
- 31) ジョン・デューイ (John Dewey 1859-1952)；アメリカの哲学者. プラグマティズムの大成者として概念道具説を主張し, 新しい行動的ヒューマニズムによって, 進歩主義教育の創始者となる. ニューイングランドのヴァーリントンに生まれ, ヴァーモント大学を卒業, ジョンス・ホプキンス大学で学位を取り, シカゴ大学, コロンビア大学の主任教授としてアメリカの哲学界のみならず, 思想界全体を指導した.
- 32) オットー・フリードリッヒ・ボルノー (Otto Friedrich Bollnow 1903-1991)；現代ドイツの教育哲学者の第一人者. 実存主義哲学 (キルケゴール, ハイデッガー, ヤスパーズ, マルセル, サルトル) を背景とした教育思想を体系的に教育学に組み入れ, 近代および現代の哲学思想と対決しつつ哲学的人間学の視点から, 広く哲学・教育学・言語学・文学・芸術等の領域における人間の諸現象を通して人間の全体を理解し, また人間の全体からこれら諸現象を理解しようとする課題を, 哲学的教育学の人間学の基本的課題としている.
- 33) マックス・ヴェーヴァー (Max Weber 1864-1920)；ドイツの社会学者・経済学者. ベルリン大学やミュンヘン大学で教授職についた. 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で社会理論に大きな影響を与え, ワイマール憲法の草案を書いたとも言われている.
- 34) マックス・ヴェーヴァー著, 大塚久雄訳；プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神, p.360, 岩波文庫, 1999年.
- 35) Florence Nightingale (1882) ;前掲書19), pp.90-91.
- 36) Florence Nightingale (1865) ;前掲書16), pp.437-462.
- 37) Florence Nightingale (1860) ;前掲書3), p.16.
- 38) Florence Nightingale (1865) ;前掲書16), pp.437-462.

- 39) 福田邦三訳；聖トマス病院ナイチンゲール看護学校100年の歩み, p.70, 日本看護協会出版会, 1979年.
- 40) Florence Nightingale (1860); 前掲書3), p.152.
- 41) レベッカ・ストロング (Rebecca Strong 1843-1944); 1867年にナイチンゲール看護婦養成学校に入学した。彼女は看護教育において臨床に入る前に3か月の基礎教育を始めて開始し, 看護登録制度を推進した。100歳を超えても尚, 知的能力を有していた。
- 42) デュルケイム著, 佐々木交賢訳; 道徳教育論, 誠心書房, 1974年.
- 43) Florence Nightingale (1888); 前掲書20), p.331.
- 44) Florence Nightingale (1860); 前掲書3), p.15.
- 45) プラトン (Platon 427-347. B・C); アテナイの貴族の息子として生まれた。プラトンは三つの対話集『弁明』『クリトン』『バイドロス』を著して, 師ソクラテスの裁判と最後の日々を忘れられないものにした。この対話集にはソクラテスに対するプラトンの深い敬虔が鮮明に現れているとされる。
- 46) 二宮陸雄著; しられざるヒポクラテス, p.162, 篠原出版, 1990年.
- 47) ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820-1903); イギリスの進化論哲学者。社会ダーウィニズムの指導的提唱者。
- 48) 清水幾太郎編; 世界の名著46 スペンサー, 『科学の起源』, pp.337-396, 中央公論社, 1995年.
- 49) 清水幾太郎編; 前掲書48), スペンサー, 『進歩について-その法則と原因』, pp.399-442.
- 50) 清水幾太郎編; 前掲書48), スペンサー, 『知識の価値-教育論第一部』 pp.445-486.
- 51) 清水幾太郎編; 前掲書48), p.457.
- 52) ルネ・デュボス (Rene Dubos 1901-1982); フランス生まれ, ハーヴァード大学, ロックフェラー大学教授を歴任した。
- 53) ルネ・デュボス著, 木原弘二訳; 人間と適応, みすず書房, 1982年.
- 54) ホイットフィールド (Mr. Whitfield); MD, ルーシー・セーマーの『ナイチンゲール伝』では内科医。クックのそれは薬剤師と訳されている。ナイチンゲールがホイットフィールド氏に宛てた手紙には apothecary と書かれている。イギリスでは一種の薬店主が開業医も兼ねたらしいのでどちらも正しい。
- 55) ジョン・クロフト博士 (John Croft 1833-1905); ナイチンゲール看護学校の教官としてホイットフィールドの後任になった聖トマス病院の外科医。訓練生に対して講義, 症例のチェック, 定期的な試験等を行った (1873-1891年)。
- 56) Florence Nightingale (1882); 前掲書19), p.79.
- 57) Florence Nightingale (1888); 前掲書20), p.322.
- 58) Florence Nightingale (1882); 前掲書19), pp.86-88.
- 59) Florence Nightingale (1882); 前掲書19), pp.85-89.
- 60) 高木喜寛著; 高木兼寛伝, 三秀社, 1922年。松田誠著; 高木兼寛伝, 講談社, 1990年.
- 61) ヒポクラテス; (Hippocrates B・C460年頃); 医学の父とも呼ばれるギリシャの医師。医業を職業とするもののヒポクラテスの誓いを作ったといわれる。医学史をまとめた『ヒポクラテス事典』がある。
- 62) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; ナイチンゲールと6人の弟子, 医学書院, 1972年.
- 63) アグネス・ジョーンズ (Agnes Jones 1832-1868); ジョン・ロレンス卿 (後の Sir John Lawrence) 参照のこと) の姪。彼女は美貌と情熱的な愛他精神と妥協を許さぬ道徳的潔癖さを受け継いでいた。ナイチンゲールの活動に啓発され, 1860年にカイゼルスウェルト学園で二年間学んだ後に, 聖トマス病院のナイチンゲール看護師養成学校で一年間学んだ。彼女はナイチンゲールの最優秀にして最愛の生徒であった。
- 64) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), pp. 4-5.
- 65) ウィリアム・ラズボーン; (Rathbone William 1819-1902); リヴァプールの商人と船主たちの間に代々君臨してきた一族の長男。一族が組織する会社の筆頭の地位にあり, 博愛と自由主義精神の伝統を受け継いだクエーカー教徒。祖父は奴隷廃止論者。

- 66) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.13.
- 67) Florence Nightingale (1871); Introduction by Florence Nightingale [In] Memorials of Elizabeth Jones. By her sister. Florence Nightingale. London & Co, (湯植ます他訳; ナイチンゲール著作集第三巻, アグネス・ジョーンズをしのんで, p.24, 現代社, 1985年.)
- 68) ユーナ; ユーナ (Unna) というのはエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser 1552-1597) の『妖精の女王』に登場するユーナ姫のこと. その第一巻には森の茂みから一頭のライオンが躍り上がり, ユーナ姫に襲い掛かった. が, 血に飢えたけり狂った心はユーナ姫の哀れみの情でやわらげられ, 輝く姫の姿に驚いて雄々しい力もうせた, 美は最も強いものを支配し, 真実は仇なす無法をも屈服させることができるとは不思議なものであるという記述がある. ナイチンゲールは『アグネス・ジョーンズをしのんで』の中でユーナとライオンの物語をとて伝説とは思えない, 救貧院病院の改革に取り組んで死亡したアグネス・ジョーンズをユーナと呼ばせていただきたいと, 貧民をライオンに例え, ライオンを馴らすより難しい貧民がいたと述べている. p.244
- 69) ルーシー・オズバーン (Lucy Osburn 1837-1891); ウィリアム・オズバーン (William Osburn 東洋学者) の娘. シドニーに到着してすぐに同地を訪問して銃撃されたアルフレッド皇太子の看護に当たりヴィクトリア女王から感謝の言葉が述べられた.
- 70) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.18.
- 71) ヘンリー・パークス (Henry Parkes 1815-1898); ヴァーミンガム出身のオーストラリアの政治家. ナイチンゲールはシドニーの療養所の看護について文通していた.
- 72) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.19.
- 73) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.37.
- 74) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.40.
- 75) アンジェリック・ルシル・プリングル (Angelique Lucille Pringle 1846-1920); ナイチンゲールの愛弟子の一人. ナイチンゲール看護学校卒業後, エジンバラ看護学校に赴任して看護の教育に関わった. ナイチンゲールはプリングルのことをパール [真珠] と呼んで特にかわいがったとされる. クック伝『ナイチンゲールその生涯と思想』
- 76) 国家登録制度問題; 看護師がイギリス医学会から認められたことにより, 1887年にはベットフォード・フェンウィック夫人 (Ethel Gordon Fenwick 1857-1947) が提唱したイギリス看護婦協会の組織造りと看護婦登録制度導入についてナイチンゲールが猛烈に反対した問題. 結局, ヴィクトリア女王の三番目の娘, クリスチャン王女 (Christian Princess 1846-1923); が看護協会の組織造りに協力を表明し, イギリス看護協会が王立看護協会と改名したことによってナイチンゲールはこのことを事実上認めた.
- 77) レイチェル・ウィリアムズ (Rachel William 1840-1908); 長年, ロンドンの聖メアリ病院の総婦長を務める. ナイチンゲールはレイチェルを女王のように気高いと評し, 特別にかわいがった. 1884-1885年までエジプト戦争に従軍した.
- 78) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.74.
- 79) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.76.
- 80) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.74.
- 81) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.77.
- 82) アリス・フィッシャー (1839-1888); 父親のジョージ・フィッシャー (George Fischer 1794-1873) は聖職者であり, 天文学者・数学者として高名な人物. 父親の死後, 看護師学校への入学を決意している. 英米両国での看護の発展にきわめて大きな影響を及ぼした.
- 83) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.88.
- 84) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.106.
- 85) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書62), p.87.
- 86) Florence Nightingale (1888); 前掲書20), p.367.
- 87) チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens 1812-1870); イギリスの小説家. 法律事務所で下働き

- 後に民法博士会館の議事速記者になり、22歳でロンドンの新聞記者になる。彼は小説中に多彩な人物を登場させ、その当時の社会悪を激しく批判した。小説『マーティン・チャズルウィット』ではギャング婦人という卑しい女性を登場させ、病院看護の実態を批判した。
- 88) Charles Dickens; MARTIN CHUZZKEWIT, Oxford University Press, 1987.
- 89) エイブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln 1809-1865) ; アメリカ第6代大統領。弁護士活動を経て国会議員となり、南北戦争では北軍の指揮をし、奴隷解放運動の中心的役割を果たした。
- 90) ウィリアム・スミス (Smith William 1756-1835) ; ナイチンゲールの母方の祖父で富豪な商人、国会議員。奴隷解放論者。
- 91) エリザベス・ピッチャー・ストウ (Harriet 《Elizabeth》 Beecher Stowe 1811-1896) ; アメリカの小説家。『アンクルトムスケベイン』で黒人開放運動に貢献した。
- 92) 斉藤真他 ; アメリカを知る辞典, p.334, 平凡社, 1986年。
- 93) Florence Nightingale (1888) ; 前掲書20), p.281.
- 94) ハリエット・マーティノウ (Harriet Martineau 1802-1876) ; 英国の女流小説家, 経済学者。デイリー・ニュースの主筆をしていた。彼女は情報や知識を小説の形で出すことを思いつき、数多くの物語を書いて政治や経済や救貧院の話などを解りやすく解説して好評を得た。『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』セシル・ウーダム・スミス著より。
- 95) Harriet Martineau; British History and Military Reform, vol.6, England and her Soldiers, p.304, Edited by Deborah Anna Logan Pickerring & Chatto, 2005.
- 96) Harriet Martineau; 前掲書95), p.305.
- 97) ドロテア・リンド・ディクス (Dorothea Lynde Dix 1802-1887) ; アメリカの婦人慈善家でユニテリアン教徒。1861年に陸軍看護婦監督に任命され、陸軍大臣から陸軍看護婦部隊の編成補充の権限と責任が与えられた。看護婦のトレーニングの経歴はなかったが、過去の慈善事業で巧みな組織力を持っていた。病弱の身をもって監獄、養老院、白痴院の建設改良に努力した。その足跡はアメリカの各州及びヨーロッパの各国に及んだ。日本にも当時のワシントン駐在代理大使森有礼を動かして、白痴院 (精神病院) を建設した。
- 98) Josephine A. Dolan (1973) ; Nursing in Society, (小野泰博他訳 ; 看護。医療の歴史, pp.250-251, 誠信書房, 1978年。)
- 99) Harriet Martineau; 前掲書95), p.304.
- 100) クララ・バートン (Clara Barton 1822-1912) ; マサチューセッツ州・ノースオックスフォード出身で、第六マサチューセッツ連隊がワシントンに到着したときに負傷兵の手当てをしたり、食事の世話をしたりした。1881年にワシントンに赤十字委員会を設立し、政府を説得してジュネーブ条約に批准させた。『看護医療の歴史』より。
- 101) ジョージアナ・ウールセイ (Georgy (Georgeanna) Woolsey) ; エール大学医学部教授フランシス・ベーコン (Francis Bacon) の妻, ニューヨーク病院で短期教育を受けた後に病棟実習を受け、ディクスと一緒に看護実践を行った。わが国初の看護教育のテキスト『The Hand Book of Nursing』は彼女の著作であると考えられている。
- 102) Josephine A. Dolan (1973) ; 前掲書98), p.254.
- 103) Josephine A. Dolan (1973) ; 前掲書98), p.271.
- 104) リンダ・リチャーズ ; (Linde Richards 1841-1930) ; ボストン市立病院の看護師であった。看護を習おうと病院にいったが、その内容に失望し、再度教育を受けることを決意、1872年に一年課程のニュー・イングランド病院附属看護師養成所に入学した。卒業後、ベルビュー病院の夜間監督者の仕事をしてしたが、ボストン養成学校設立にいたって、そこの校長として赴任した。その後に、日本からの看護師の教育者としての要請に応じた。
- 105) 尾田葉子訳 ; リンダ・リチャーズ回想記, p.44, 看護の科学, 1976年。
- 106) Josephine A. Dolan ; History of Nursing, Saunders, Company, 1958.
- 107) ギル・ワイリー (Gill Wylie) ; ベルビュー病院の当時インターン医師。私費で外国の看護状況を見

- 聞いた。
- 108) フランシス・ベーコン (Francis Bacon) ; エール大学医学部教授, ジョージアナ・ウールセイの夫。ジョージアナ・ウールセイはアメリカの裕福な家庭の娘であり, ニューヨーク病院の短期教育を受けた後, 病棟実習から陸軍に従軍, 南北戦争を経験した後, 看護師教育に情熱を傾けた女性である。
- 109) 大山捨松 (1860-1919) ; 旧姓山川。岩倉使節団とともにわが国最初の女子留学生。ニューヘブンの宣教師レオナルド・ベーコン夫妻の家庭に入って教育を受けた。卒業後, ニューヘブンの市民病院で看護学の勉強をした。帰国後, 陸軍大臣大山巖と結婚した。日本赤十字社に働きかけ日本篤志婦人会を発足させた。東京帝国大学の総長になった山川健次郎は実兄である。
- 110) Josephine A. Dolan (1973) ; 前掲書98), pp.278-280.
- 111) アニー・ワーヴァートン・グットリッチ (Annie Warburton Goodrich 1876-1955) ; アメリカの看護教育者。看護を徒弟制度から専門職に転換するのに貢献した。1914年にコロンビア大学のティーチャーズ・カレッジに進学し, ヘンリーストリート・セツルメントや陸軍看護学校設立にもかかわり, 1923年にエール大学看護学部の学部長となり, 看護に他の専門職と同じように大学卒業という地位をもたらした。
- 112) Mary Adelaide Nutting & Lavinia L. Dock (1907) ; A History of Nursing, p.380, Thoemmes Press, 2000.
- 113) イザヴェル・ハンプトン・ロブ (Isabel Hampton Robb 1860-1910) ; 看護教育を体系的に整備する先駆的な役割を果たしたアメリカの看護教育者。1889年, ジョンス・ホプキンス看護師養成学校の初代校長, 看護理論と看護実践の両側面を網羅する高レベルの看護教育を目指した。更に看護教育と卒後教育コースを併設した大学教育にも力を注いだ。『American Journal of Nursing』の創始者の一人で, アメリカ看護協会の設立にも尽力した。
- 114) Florence Nightingale (1888) ; 前掲書20), p.427.
- 115) メアリー・アデレード・ナッティング (Mary Adelaide Nutting 1858-1948) ; カナダのケベック出身。ロブの監督するジョンス・ホプキンス看護学校の第一期生。ロブの後を受けて同校の校長となった後, コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの病院管理コースの家庭管理 (後に看護師教育) の教授になった。著作に『History of Nursing』がある。
- 116) アメリカ方式 ; マトロンは存在せず, 寄宿舎は準備されるが制度でなく, 学理的教育指導が成され, 婦長という職種が看護学生の教育指導の責任を取る。児玉香津子訳『看護の歴史』 p.180より。
- 117) 東インド会社 ; インド貿易を目的として1600年に設立された商事会社, 1858年に解散するまで近代インドの歴史に政治経済上, 種々の役割を果たした。
- 118) ジョン・スチュワート・ミル (John Stuart Mill 1806-1873) イギリスの哲学者, 経済学者。ジェームズ・ミルの息子。ベンサムの助言に基づき父ジェームズによって早期教育を受ける。『経済学原論』や『自由論』を書いて, 私有財産制や経済的自由を擁護しつつもその限界を認め, また自由を経済的自由からよりも精神的自由から根拠付けて, 自由主義に新しい展開を与えた。
- 119) A・L・モートン著, 鈴木亮他訳 ; イングランド人民の歴史, p.387-388, 未来社刊, 1988年。
- 120) 『インド陸軍の衛生状況に関する勅撰委員会によって考察を委託された駐屯地報告書中の調査報告に関する所見』 ; わが国では『インド陸軍の衛生』として翻訳出版されている。
- 121) エドワード・ヘンリー・スミス・スタンレー卿 (Edward Henry Smith Stanley 1820-1893) ; 英国の政治家。主として外交政策上移民政策に尽力し, 特にイギリス国王のインド直接統治実現に尽くした。
- 122) Cecil Woodham - Smith (1950) ; Florence Nightingale, (武山満智子他訳 ; フロレンス・ナイチンゲールの生涯 [下巻], p.149, 現代社, 1987年。)
- 123) Harriet Martineau ; 前掲書95), p.248.
- 124) Harriet Martineau ; 前掲書95), p.240.
- 125) Harriet Martineau ; 前掲書95), p.251.
- 126) ジョン・ローレンス卿 (John Laird Mair Lawrence I 1811-1879) ; 英国のインド行政官として各

- 地を統治していたが、前任者エルギン卿死亡によってナイチンゲールが後任として強く彼の任命を懇願したと言われている。
- 127) ロバート・コーネリア・ネピア卿 (Robert Corneria Napier 1810-1890) ; 英国の陸軍将校。ベンガル暴動や中国遠征等で活躍した。
- 128) Cecil Woodham - Smith (1950) ; Florence Nightingale, (武山満智子他訳 ; フロレンスーナイチンゲールの生涯 [下巻], p.250, 現代社, 1987年.)
- 129) インドの病院に置ける看護システムについての助言。わが国では『インドの病院における看護』として翻訳出版されている.)
- 130) リットン・ストレイチー (Lytton Strachey 1880-1932) ; イギリスの伝記作家で批評家。ヴィクトリア時代の文学・思想・道徳を批判, 偶像破壊的な伝記叙述のスタイルを確立した。ナイチンゲール伝やヴィクトリア女王伝が有名。
- 131) ルイ・パスツール (Louis Pasteur 1822-1895) ; フランスの細菌学者である。彼は“近代細菌学の父”と呼ばれた。ワクチンによる予防接種を創始した。又、肺炎菌やレンサ菌の発見も彼の業績である。
- 132) ジョセフ・リスター (Lord Joseph Lister 1827-1912) ; リスターは“近代外科学の父”と呼ばれ、石炭酸を消毒液に使用して外科手術法を開拓し、術後の感染防止に貢献した。
- 133) ロベルト・コッホ (Robert Koch 1843-1910) ; 19世紀から20世紀のドイツの細菌学者。1866年(慶応2年)にゲッティンゲン大学を卒業後、1872年-1880年(明治5-明治13年)ウォルシュタイン地方の医官として細菌学の研究に従事、1876年(明治9年)炭疽菌の分離・純粋培養に成功。1882年(明治15年)結核菌を発見した。1884年(明治17年)にはコレラ菌の純粋培養に成功した。1885年(明治18年)ベルリン大学衛生学教授に就任、1890年(明治23年)ツベルクリンを創製した。北里柴三郎はコッホの弟子である。
- 134) Florence Nightingale (1863) : Observation on the evidence contained in the stational reports submitted to her by the Royal Commission on the sanitary state of the army in India. (湯槇ます他訳 : ナイチンゲール著作集第三巻, インド駐在陸軍の衛生, 現代社, 1983年.)
- 135) Florence Nightingale (1863) : Life or death in India. (湯槇ます他訳 : ナイチンゲール著作集第三巻, インドにおける生と死, 現代社, 1983年.)
- 136) Florence Nightingale (1865) : Suggestions on System of Nursing for Hospital in India. (湯槇ます他訳 : ナイチンゲール著作集第一巻, インドの病院における看護, 現代社, 1983年.)
- 137) ジョン・ロック (John Lock 1632-1704) ; イギリス経験論の代表的哲学者。近代民主主義の代表的思想家の一人。オックスフォードで医学と哲学を学ぶ。ピューリタン革命, 王政復古, 名誉革命と激動していく時代に生活し, 人民主権に基づく代議的民主政治の理論を基礎づけることによって名誉革命の指導的理論家になった。医師でもあり, ホイッグ党初代党首, シャフツベリー伯爵と親交を結び, 政治的にもその生涯を共にした。
- 138) アガ・カーン (Aga Khan 1877-1957) ; インドのイスラム教イスマール派の教主。1898年にナイチンゲールのもとを訪れた。ナイチンゲールの説明する衛生問題の説明に対して彼は, イギリス国民はどのような進歩があったのかと問うた。彼の場合は宗教すなわち, 霊性のみが大切であったとクックは述べている。
- 139) Litton Strachey; Eminent Victorians, p.159, Penguin Books, 1986.
- 140) Sir Edward T. Cook; The Life of Florence Nightingale, (中村妙子他訳 : ナイチンゲール [その生涯と思想Ⅲ], p.367, 時空出版, 1993年.)
- 141) テオドール・フリードナー (Pastor Theodor Fliedner 1800-1864) ; プロテスタントの牧師。ドイツのカイゼルスウェルトに赴任した際に, 人々が経済的に苦境に陥っていたため, 救済資金を求めてイギリスに足を伸ばした。そこでエリザベス・フライ女史の女囚保護事業活動を知ってドイツに広めようとした。その一環として1836年に看護師の養成所も含めたカイゼルスウェルト学園を創立した。

- 142) Florence Nightingale (1851) : The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses, under the Direction of the Rev, (湯楨ます他訳：ナイチンゲール著作集第一巻, カイゼルスウェルト学園によせて, 現代社, 1983年.)
- 143) 聖ヴァンサン・ド・ポール (Vincent de Paul. St 1580-1660) ; 司祭で博愛主義者. 1600年に司祭になるが, 1605年に海賊に捕らえられ, 奴隷としてうられる. キリスト教信仰に戻りたいと主人を説得し, 1607年にフランスに逃れ, 1625年にラザリスト会という伝道司祭組合を作り, 1634年に慈善女子修道女会を作った. 1737年に聖人の一人に加えられた.
- 144) ジョハン・ヘンリック・ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827) ; 哲学者としてまた, 教育思想家でもあり, 貧民教育の実践者としても有名である.
- 145) ヨハン・フレデリック・ヘルバルト (Johann Friedrich Herbert 1776-1841) ; ドイツの哲学者. ケーニヒスベルグ, ゲッティンゲン大学の教授を歴任した. ヘルバルトによれば我々は経験から出発しなければならないが, その経験は何ら, 認識を与えない. 経験概念を修正し, その矛盾を取り除くことが哲学の仕事である. 矛盾に満ちた経験概念を矛盾なき明瞭判明な概念にまで修正し, 現象界に明確な基礎を与える「諸実在者の学」としての形而上学を構想した. この形而上学を応用した自然哲学と心理学, 一方価値判断に関わる美学と倫理学とから, 特に心理学と倫理学を基礎として体系的な教育学を組織した.
- 146) エミール・ハウスクネヒト (Emile Hausknecht 1853-1927) ; 1887年東京大学の教育学部教授として雇用された.
- 147) ベンジャミン・カール・レオポルド・ミュルレル (Benjamin Carl Leopold müller 1824-1893) ; ドイツ生まれ. 1871年 (明治4年) 来日, 大学東校の学制の制定に尽力した. 外科学・解剖学・生理学・神経学・薬局学などを教授, 東京帝国大学医学部におけるドイツ医学の基礎を築いた.
- 148) テオドル・エドワード・ホフマン (Theodor Eduard Hoffmann 1837-1894) ; 明治初期に来日したドイツ人医師. ドイツ海軍軍医少尉. 東京帝国大学で内科・病理・薬物学担当した.
- 149) エルヴィン・バルツ (Erwin von Bälz 1849-1913) ; 1872年 (明治5年) にライプツヒ大学医学部を卒業, 明治9年東京医学校 (後の東京帝国大学医科大学, 東京大学医学部) の内科医学正教授として来日. 以後, 1902年 (明治35年) まで在職し, 日本の近代医学の基礎づくりに貢献した.
- 150) ルドルフ・ルードヴィッヒ・ウィルヒョウ (Rudolf Ludwig Virchow 1821-1902) ; 1858年に『細菌病理学』を著した. の病理学的な分野における功績は“ウィルヒョウの転移”としても残っており, 人体の病理学的研究に著名な業績を残した事で有名であると共に政治家, 人類学者としても有名である.
- 151) E・H・アッカークネヒト著, 館野之男他訳 ; ウィルヒョウの生涯, p.161, サイエンス社, 1985年.
- 152) フレデリック皇后 (The Empress Fredrich 1840-1901) ; ヴィクトリア女王の長女で名前をヴィクトリア・アデレイド・マリー・ルイズという. プロシアの王ギョウム1世の長子フレデリックと結婚した. 後のドイツ皇帝カイゼルの母親.
- 153) フリードリッヒ3世 (Wilhelm III Fredrich 1831-1888) ; 初代ドイツ皇帝ヴィルヘルム1世の長男で第2代ドイツ皇帝. イギリス, ヴィクトリア女王の長女と結婚した. 通称カイザーと呼ばれたヴィルヘルム2世の父.
- 154) オットー・エデュアルト・ビスマルク (Otto Eduard Bismarck 1815-1898) ; ドイツの政治家. 鉄血宰相と言われた. 1862年プロシアの首相となり軍備を拡大し, 1871年, プロシア王ヴィルヘルム1世を皇帝とするドイツ帝国を建設, 自ら初代首相となり, 産業を保護し, 社会主義運動をおさえながら社会保障を進めた.
- 155) 高木兼寛 (1849-1920) ; 宮崎県生まれ. 1868年 (明治元年), 東北征討軍に軍医として加わった後, 鹿児島藩立開成学校に入学, イギリス人医師ウィリスに学んだ. 1872年 (明治5年) より海軍に出士し, 1875年 (明治8年) からイギリス, セント・トマス病院に留学する. 帰国後, 東京海軍病院病院長を務めながら, 1881年に成医会を結成. 成医会講習所を設立 (現在の東京慈恵医科大学の前身). 1882年 (明治15年) 海軍省医務局長となり, 脚気病対策に取り組んだ. 1888年 (明治21年)

- 我が国初の医学博士となった。
- 156) ウィリアム・ウィリス (William Willis 1837-1894)；薩摩藩がイギリス公使を通して招いたイギリス人外科医。
- 157) ウィリアム・アンダーソン (William Anderson 1842-1900)；イギリス人軍医。1879年(明治12年)の著作に『看病要法』がある。
- 158) 西南戦争；1877年(明治10年)に鹿児島士の士族が征韓論を受け入れられずに新政府から身を引いた西郷隆盛を担いで起こした戦争。
- 159) 婦人慈善会；伊東博文夫人，井上こわし夫人，森有礼夫人，有須川の宮城仁親王妃薫子夫人など。
- 160) 津田梅子 (1864-1929)；明治期から大正期の女子教育家。津田義塾大学。1871年(明治4年)，開拓史派遣の5人の少女の一人として岩倉使節団と共にアメリカに渡った。他メンバーは吉益亮子，上田貞子，山川捨末，永井繁子。
- 161) メリー・キダー (Merry Eddy Kidder 1834-1910)；アメリカ，バーモント州生まれ。外国伝道的情熱からわが国に来日した初めての女性宣教師。1870年(明治3年)に日本最初の女子教育機関としてフェリス女学校を開設した。
- 162) 亀山美知子著；女達の約束，pp.41-42，人文書院，1990年。
- 163) アビィ・マリア・コルビー (Abby Maria Colby 1847-1917)；アメリカの女性宣教師，教育者。
- 164) 新島襄 (1843-1890)；明治期の啓蒙思想家及び教育者。アリカン・ボードの宣教師。同志社大学を設立した。
- 165) 森有礼 (1847-1889)；薩摩藩士。上野景範に英学を学び，イギリス・アメリカに留学。第一次伊藤内閣の時に初代文部大臣となり，学校制度の改正を行う。また私財により商法講習所(現在の一橋大学)を設立した。
- 166) 同志社史料編集所；新島襄その時代と生涯，同志社，1993年。
- 167) 同志社史料編集所；前掲書166)，p.168。
- 168) ジョン・カッティング・ベリー (John Cutting Berry 1847-1936)；アメリカン・ボードの宣教師。1871年(明治4年)にフィラデルフィアのジェファーソン医科大学を卒業。1872年(明治5年)来日。神戸市で貧しい人たちの施療に当たった。1983年，京都に移り医学校，病院，看護師学校の設立に参画した。
- 169) 宣教師総辞職事件；1896年(明治29年)，アメリカン・ボード派遣の同志社宣教師全員が辞職し，新島襄以来同志社とアメリカン・ボードとの間に成立していた関係が決裂・断絶した事件。直接の発端は1895年(明治28年)アメリカン・ボード派遣の委員と同志社側委員との間に京都の宣教師館の帰属と使用権，同志社病院，京都看病婦学校の管理権，同志社のキリスト教主義教育について協議が始められたことに起因する。同志社側は従来行われてきたアメリカン・ボードからの寄付と教員の派遣を謝絶することを基本として交渉に臨み，決裂した。その結果，総辞職となった。
- 170) 佐伯理一郎 (1862-1952)；明治期から昭和初期にかけての名高い産婦人科医で看護師・助産師教育者。看護教育の実質的責任者として，戦後の教育改革までその責任をになった。著作に『普通看護学』がある。
- 171) 桜井ちか (1855-1928)；東京都出身，キリスト教主義による女子教育家。桜井女学校設立。
- 172) メアリー・ツルー女史 (Mary True 1840-1895)；アメリカニューヨーク州生まれ。清教徒の流れを汲む敬虔な家庭に育つ。病弱な夫とともに伝道生活に入るが，夫の死後，その志を継ぎ，1873年中国に渡るが，伝道は困難であった。1874年(明治7年)来日。アメリカ長老教会伝道局の勧めにより，京橋教会で伝道を開始するかたわら，女学校で教育を行った。
- 173) 大濱徹他著；女子学院の歴史，同成社，p.250，1985年。
- 174) 大濱徹他著；前掲書173)，p.342。
- 175) 岡見京 (1859-1941)；南部藩氏族の娘，旧姓西田。頌栄女学校を創立した岡見一族の一人。岡見千吉朗と結婚。明治17年アメリカにわたる。フィラデルフィアのペンシルバニア鉄道会社重役モリスの支援を受けてフィラデルフィア女子医科大学に入学。1889年(明治22年)に卒業。医学博

- 士の学位を得て帰国した女性。帰国後、慈恵医院で婦人科主任として働いたが3年間で退職、頌栄女学校の教頭をしていた。ツルー女史は彼女を衛生園設立に参画させ運営の責任者とした。
- 176) アンリ・デュナン (Jean Henri Dunant 1828-1910)；世界赤十字の創立者。スイス人。イタリアとオーストリアにおきた戦争でソルフェリーノの激戦とクリミア戦争における救護活動を目撃した。人道主義の立場から、戦傷者救護の国際的機関を作ることを提案した。
- 177) 佐野常民 (1823-1902)；佐賀藩士。日本の政治家。日本赤十字社の創始者。官職枢密院顧問官、農商務大臣、大蔵卿、元老院議長爵位は伯爵。日本赤十字社名誉社員、佐賀の七賢人に挙げられている1873年(明治6年)、ウィーン万国博覧会事務副総裁に就任して、ウィーン万国博覧会に派遣される。博覧会を通じて日本の近代化に貢献し、「博覧会男」の異名を得た。1875年(明治8年)、元老院議官となる。1877年(明治10年)に西南戦争が起こり、敵味方の区別なく戦場で負傷した将兵を看護する赤十字社の知識を元に、「博愛社設立請願書」を政府に提出するが不許可となったが、熊本で有栖川親王から博愛社設立の許可を得た。
- 178) 大給恒 (1839-1910)；第10代奥殿藩(現在の岡崎市)藩主乗利の次男として生まれた。明治維新後、元老院議官となり、1869年(明治2年)に乗謨恒(のりかたゆずる)となる。以後、大給恒と呼ばれるようになる。その後、国際赤十字社に倣って佐野常民と共に博愛社を創設、副社長に就任した。博愛社は現在の日本赤十字社の前身である。
- 179) 岩倉具視 (1825-1883)；幕末・明治時代初期の公家出身の政治家。
- 180) 佐賀の乱；1874年(明治7年)江藤慎平らを中心にして佐賀で起こった明治政府に対する氏族の反乱である。不平士族による初の大規模反乱であったが、電信の情報力と汽船の輸送力・速度を活用した政府の素早い対応もあり、激戦の末に鎮圧された。
- 181) 有栖川宮熾仁親王 (1835-1895)；有栖川宮熾仁親王は有栖川宮家の第一王子として京都に生まれ、17歳のとき孝明治天皇の妹、和宮(かずのみや)と婚約していたが、1862年(文久2年)政略結婚により、和宮は14代将軍家茂に降嫁。その後、倒幕を決定づけた戊辰戦争が1868年(慶応4年)に勃発すると、熾仁親王は東征大総督に任ぜられ、更に1877年(明治10年)の西南戦争でも征討総督となり、明治政府軍の最高指揮官を務めた。
- 182) 大山巖 (1842-1914)；鹿児島県出身。西郷隆盛の従兄弟。明治維新政府で陸軍卿、陸軍大臣。近代日本陸軍の建設に貢献した。妻が出産後に産褥熱によって死亡した為、残された子の育児と教育の為、捨松と結婚したとされる。
- 183) 橋本綱常 (1845-1909)；1872年(明治5年)ドイツに留学。1877年(明治10年)帰国。陸軍軍医監、東京大学医学部教授となった。1884年(明治17年)ヨーロッパに視察の際、赤十字事業を調査し、博愛社病院の設立に尽力した。1886年(明治19年)日本赤十字社病院の初代院長となり、日本赤十字社病院の看護師養成事業を推進した。
- 184) 吉川龍子著；高山盈の生涯、p.64、蒼生書房、1875年。
- 185) 石黒忠恵 (1845-1941)；医学者、陸軍軍医。1879年(明治12年)東京大学医学部総理心得となり、次いで陸軍軍医監、軍医本部長としてわが国の軍医制度の創設に尽力した。1920年(大正9年)、子爵になり、枢密院顧問官、日本赤十字社社長となった。